



月刊 もぐら通信

Mole Communication Monthly Magazine

2021年4月1日 第103号 初版

www.abekobosplace.blogspot.jp

あなたへ：
迷う事のない迷路を通って
あなただけの番地に届きます

ある日、男は裏の空地に、鴉をとらえるための罠をしかけてみた。それを《希望》と名づけることにした。(略)《希望》もいぜんとして、鴉たちから無視されたままだった。(略)ある朝、(略)砂をとり除き、蓋を開けてみて、驚かされた。桶の底には、水が溜まっていたのである。

(『砂の女』第三章第28節および第31節 全集第16巻、232ページ上段および244ページ下段)



掃き溜めの鶴ならぬゴミ溜めの鴉、存在と透明感覚への案内人、即ち超越論の八咫鳥

「飛ぶ男」の話は知っていましたよ。例の箱根に撮影に行った時ね、「きょうは鴉がいないなあ」とか「よく鴉がここに来るんだよ」なんて言っていました。それで、鴉が作品に登場するとか話をしていました。題名が「飛ぶ男」と言っていたかな…。以前会ったときは「スプーン曲げ」と言っていたのに、飛ぶ男が出てくるんだよって。(「贗月報29：ラングラー・ジープー白鳥省吾」(元・読売新聞記者)：全集第29巻附録)



目次

- 0 目次…page 2
 - 1 記録&ニュース&掲示板…page 3
 - 2 『周辺飛行』論（16）：箱男 予告編—周辺飛行13：岩田英哉…page 9
 - 3 By・Way—『第四間氷期』について：草下英明…page 19
 - 4 安部公房の発明空間とファシズム：岩田英哉…page 25
 - 5 『燃えつきた地図』の団地風景（1964年）：岩田英哉…page 40
 - 6 サンチョ・パンサを求めて（2）～君の中の《君》へ～：Brexid（ブレグジット）の深い衝撃：岩田英哉…page 44
 - 7 リルケの『オルフェウスへのソネット』を読む（46）：第2部 XXI：“わたしのころよ、お前が知らない庭たちを歌えよ。”：岩田英哉…page 54
 - 8 Mole Hole Letter（19）：朝日新聞の労組副委員長（36歳）の自殺は何を意味するか…page 60
 - 9 編集後記…page 68
 - 10 次号予告…page 68
-
- ・連載物・単発物次回以降予定一覧…page 66
 - ・本誌の主な献呈送付先…page 66
 - ・本誌の収蔵機関…page 66
 - ・編集方針…page 66

PDFの検索フィールドにページ数を入力して検索すると、恰もスバル運動具店で買ったジャンプ・シューズを履いたかのように、あなたは『密会』の主人公となって、そのページにジャンプします。そこであなたが迷い込んで見るのはカーニヴァルの前夜祭。

今月の都市作家たち

KIYOSUE KOHEI liked

東條慎生のReal genuine fakes@inthewall81 May 21

それを異端と見なすことで国家が正統概念を立ち上げるという分析が語られている。流動的、無名的なものとしての都市。満洲で育った安部公房、五歳で朝鮮に渡った日野啓三、そして朝鮮で生まれ育った後藤明生がいずれも後年都市小説を書くようになるわけで。

今月の安部公房フリークYouTuber

木石岳 (アサヒ) @asahism8 May 27

中学生の頃から一途に慕い続けている安部公房大先生の小説の魅力を語りましたよ。読んだことある人も多いとおもうけれど、動画で気になった未読本があったらぜひ読んでみてほしいです。

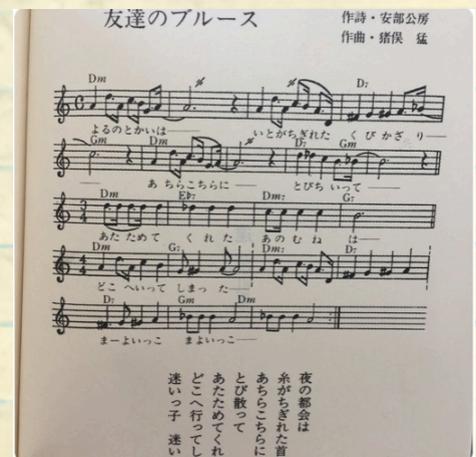
【奇妙な世界】安部公房の小説の魅力を語りました。 <https://youtu.be/VYLuEtzqhc8> @YouTubeさんから



今月の友達のブルース

みっくん@読書垢@Mikkunbooklover May 26

ヴァイオリンで弾いてくれる友達募集



今月の読書会 (京都)

【関西】彩ふ読書会@読書垢 Retweeted

ののの@彩ふ読書会・読書垢@lapinrire May 26

“5/26読書会in京都”京都で読書会を開催しました！

午前はオススメ本を紹介しあう形式の推し本披露会、午後は安部公房著「砂の女」を課題本とした読書会でした！参加して下さいました皆様、ありがとうございました！ #読書会 #彩ふ読書会 #京都



山本多津也@猫町倶楽部@tatsuya1965 May 21

【福岡で開催】#猫町倶楽部 の課題本は安部公房の『砂の女』

6/15(土)開催。会場は天神の「本のあるところ ajiro」

<http://www.nekomachi-club.com/schedule/67425>



今月の上演

HEP HALL@HEPHALL May 17

【イベント写真】2019.5.17-19 阪本知プロデュース公演
#2大竹野正典没後10年記念企画公演「密会-Rebuild-」
を土台に、深川通り魔殺人事件を題材にした大竹野正典の
「密会」を阪本知が再構築！当日券は各開演の45分前から
販売です。 <https://hephall.com/42769/>



今月の追悼京マチ子

ホッタカシ@t_hotta May 14

京マチ子は勅使河原宏が安部公房『砂の女』を日米合作で映画化するという企画が起ち上がった時、主演候補になった。安部は砂穴に捕まる男をアメリカ人にしたシノプシスを書いている。これは頓挫したが、京マチ子の安部文学出演はその後、『他人の顔』で実現した。京さんの砂の女も観たかったな。

更紗@sarasara_ogawa3 May 14

「羅生門」や「雨月物語」のイメージが強い方ですが、こんな斬新なデザインのポスターのロマンティック・スリラーや(右上はDVD) #安部公房 原作の芸術映画にも出演されていたのですね。
#京マチ子 様のご冥福をお祈り申し上げます。



BusinessBooks@BtoBooks May 26

#日経新聞 #書評 2019年5月16日 (木曜日)

- ★京マチ子さんを悼む (映画評論家：白井佳夫 戦後日本象徴したスター)
- 他人の顔 (新潮文庫) 安部公房

今月の箱男

スガダイロー@sugadairo Apr 26
安部公房ナイト用に作った箱マスク



今月の安部公房フリーク画家

平野廣盛@kousei410 May 23

心象風景 下絵

(安部公房 砂の女からの、インスピレーション)



今月の壁

ヒロ@Pocky1123 May 24

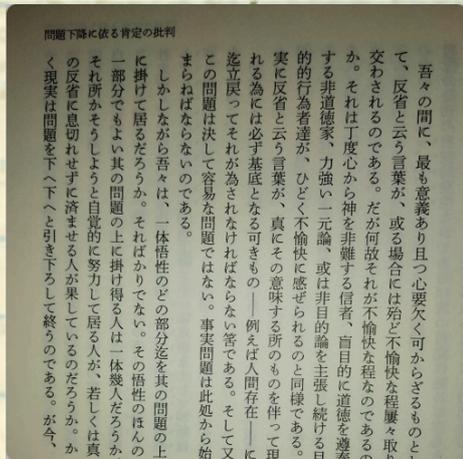
趣味の古書展から帰宅。夏目漱石『硝子戸の中』16版（大正7年）1500円、安部公房『壁』2刷（昭和26年）300円、吉田絃二郎『G線上のアリア』初版（昭和7年）400円など。



今月の問題下降に依る肯定の批判

ツイ@kimihusaT May 23

安部公房の読み始めに何が良かったって、そりやもちろん『問題下降に依る肯定の批判—是こそは大なる蟻の巣を照らす光である—』ですよ。一番最初の作品ですもの。（古義人くんくらいにしか伝わらないネタ）



今月の電柱箱男

非おむろ@Non_omuro 21h21 hours ago
mizmiz Retweeted そりまち
安部公房。
mizmiz added,



今月の安部公房

非おむろ@Non_omuro 22 hours ago
『ポケットモンスター ミュウツーの逆襲』です、是非御覧下さい。 https://youtu.be/ez5zklt_XAQ



今月の上演前稽古

FOURTEEN PLUS 14+@f14plu May 20
本日、FOURTEEN PLUS 14+ 稽古。後半は安部公房の小説を使ってワンシーン作ってみました



今月の研究発表

Futoshi Hoshino@nosnino May 26

カルチュラル・スタディーズ学会、わたしは非会員なのですが、こここのところ1950年代の内灘闘争に絡めて安部公房・島尾敏雄らの「現在の会」について調べていたので、今回はその途中経過を報告する予定です。 <http://cultural-typhoon.com/>

今月のヤマザキマリ

ホッタタカシ@t_hotta May 25

>Q 影響を受けた作家・漫画家は？

>安部公房。俯瞰で人間観察する点が好きで、留学時代の私の心の師匠。漫画家ではつげ義春と水木しげる、手塚治虫です。

【THE INTERVIEW】漫画家・ヤマザキマリさん
「パスタぎらい」 食への渴望を「比較文化論」に

<https://www.sankei.com/life/news/190525/lif1905250023-n1.html>



今月の大陸風景

ナオダ 【文学好き連合】@読書垢@Naoda_freeman May 25

中国は、シルクロードを2ヶ月間、旅したことがあるので、「大都市」→「農村」→「砂漠」というのがすぐにイメージ出来る。人は生まれ育った環境に少なからず影響を受ける。安部公房の作風が、日本に根を張っていない感があるのは、この視点で見てよく分かるようになった。

今月のEMS Synths AKS

Tutti69@TuttiTheSkull May 20

作家としては勿論著名であるけれど電子音楽にも無茶苦茶造詣の深かった安部公房による音楽作品いくつか纏めて発掘されないかしら…素敵なもの眠っているに違いないと妄想する…



Kōbō Abe's EMS Synth AKS

安部公房、愛用のEMSシンセを前に音楽を語る。1985年

[youtube.com](https://www.youtube.com)

今月の安部公房餃子職人論争

オバジC25 真冬野美容液@alvin_uml 12 hours ago

安部公房のWikipedia、餃子の調理中の写真が使われている

文乃綴@HuminoTuduri May 25

安部公房読書会、餃子の店でやりたいという感情が高まってきた

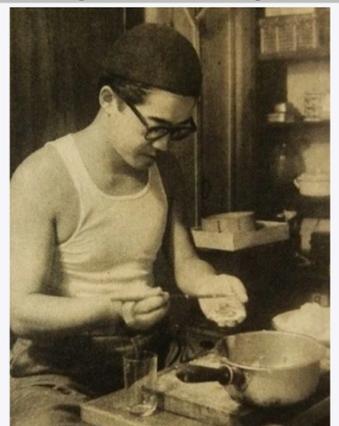
文乃綴@HuminoTuduri May 25

腹切生首三島由紀夫、餃子職人安部公房、ブルドッグ大江健三郎

文乃綴@HuminoTuduri May 25

安部公房のこと餃子職人って言うのやめろ（風評被害）

(あべ こうほう)



今月のフランス版友達

ホッタタカシ@t_hotta May 23

ホッタタカシ Retweeted NISHI THE WILD

ポン・ジュノ新作、カンヌで大評判らしい。安部公房『友達』やパゾリーニ『テオレマ』の発展版なのか？>ある家族がお金持ちの家に家庭教師、運転手、お手伝い、と入り込んでいく。



NISHI THE WILD @ryuugo0420

カンヌ映画祭2019

コンペ

Parasite...

今月のカネッティ

温又柔 おんゆうじゅう 온유쥬@WenYuju May 8

安部公房のことはを連想した。「たとえばカネッティのことを考えると、読者の数なんて問題じゃないと思うな。もちろんカネッティの読者は少なすぎる、もっと読まれるべき作家だよ。でも読者の数とは無関係にカネッティは厳然と存在する。絶対に存在してもらわないと困る作家なんだよ。そういう作家が

今月のグレン・グールド

クラシック音楽 bot@musique_bot May 4

【グレン・グールド】愛読書のうちの一つに、夏目漱石著「草枕」があった。35歳の時に、カナダを走る列車の中でウィリアム・フォーリー氏というザビエル大学教授に出会い、彼にこの本を紹介されたことから傾倒したのだそう。以降グールドは夏目漱石の本を読み漁り、安部公房の本も好んだ。

安部公房

<https://www.toonippo.co.jp/articles/-/193544>

毎日更新・2019年5月21日 ニュース

故郷モンゴルに日本文学を紹介

東奥日報

... 財団の審査を通過、故郷で初めての出版にこぎ着けた。13、15年には、翻訳した芥川や安部公房の短編作品がモンゴル翻訳連盟発行の海外短編集に載った。

<https://www.toonippo.co.jp/articles/-/193544>

太宰治など日本文学を故郷モンゴルに広めようと、青森県今別町のサンボードルジ・オユンビリグさん(30)＝ウランバートル出身＝がモンゴル語への翻訳活動に励んでいる。町の国際交流員として英語を教える傍ら、時間を見つけては作業を続け、翻訳作品数は既に100以上。故郷で出版された翻訳書は3冊ある。現在は自らファンという太宰作品を翻訳中で、「モンゴルに太宰の名を広めたい」と日々作品に向き合っている。

文化



自らの翻訳作品を手にするオユンビリグさん

『周辺飛行』論

(16)

3. 『周辺飛行』について(11)

『箱男 予告編—周辺飛行13』

岩田英哉

周辺飛行12」が本篇『箱男』の《たとえばAの場合》にほぼ同じ文章として入つてゐるのに対して、この『箱男』の予告編は、本篇『箱男』の何処にもない章であるが、しかし箱男の話です。

といふことは、安部公房の論理から云ふと、何処にもない章なのであれば、何処にでもある章である事に等しい「周辺飛行」の箱男の話だといふ事になります。それは、次のやうに始まります。冒頭の沈黙の記号「……」は「既にして」「最初から」安部公房の存在論の記号であり、これは隙間に存在する存在の話であり、時間的な差異として存在する遅延の話、即ち存在の交差点の話であることを意味してゐます。

「……もし君が箱男を見付けたいと思えば、夜、それも照明がきいたなるべく明るい場所を探せばいい。たとえば、立体交差になった、幹線道路の交差点付近。出来れば、急行の停車駅でもひかえた、繁華街の一角。車道が地下にもぐっている、切通しの上の歩道ぎわ。頭上の水銀燈が、ひときわ明るくその部分だけを際立たせているような場所。」

『イメージの展覧会 II』または『カンガルー・ノート』に歌はれた『人さらい』の詩の最後の連の最初の三行は次のやうな三行であることを思ひ出して下さい。人さらいが来て主人公が失踪するのは、

「北向きの小窓の下で
橋のふもとで
峠の下で」

といふ内部と外部の交差する場所であるといふことです。それは交差点の上ではなく、「下で」「ふもとで」あるといふことが大切なのです。この「周辺飛行」で箱男の飛行する周辺はまさに冒頭にある「夜、それも照明がきいたなるべく明るい場所を探せばいい」のであれば、本篇『箱男』の自動車の廃棄場の写真の下に配置された次の詩を私たちは思ひ出します。

「走りつづけたが
追いつけな買った人々の
贖のゴール
旗は振られ

審判も観客も
 どうに引き揚げてしまった
 夜の競技場」

どうも此の「周辺飛行13」によれば、この「夜の競技場」には「照明がきいたなるべく明るい場所」であるやうですが、しかし照明がなくとも、一向に構はないし、夜こそが存在といふべき差異を無にする、白を透明なる黒に染めた存在の布でありますから、文字通りに「「……もし君が箱男を見付けたいと思えば」と呼びかけられた君である当の私の意志が箱男を見付けなければ見付けやすい場所だよといふ意に解する事にします。さて、さうだとして、安部公房の挙げる4つの場所の例は上記引用の通りの、この作家の作品の中に同じ具体的な例を探してみると次のやうなものがありました。他にも例は幾つもある筈です。探してみるのも一興です。

1. 例1：「立体交差になった、幹線道路の交差点付近。」

例へば『方舟さくら丸』の第6章から：

「はじめ市道はバイパスと平行に走っているが、2本目の橋脚のところで距離を開けはじめ、つよく弓なりのカーブを描き、入江の向こうでふたたび交差する。その弧の内側が、道路公団に売りそこなった猪突（ぼくの生物学上の父親）名義の私有地だ。

釣り宿があったのは自動車道の真下である。（略）バイパスと市道にはさまれた、犬小屋も立てられないほどの三日月形の急斜面だけが、かろうじて残された資産のすべてである。」

（全集第27巻、288ページ上段）

「急斜面」は既述の通り、リルケに学んだ、存在の、凹へ落ちる斜面のことです。箱根隠棲時代に住んだ安部公房の仕事場の山荘が急斜面に立つてゐることを思ひ出して下さい。〔註1〕

〔註1〕

リルケの『オルフェウスへのソネット』を読む(37)：第2部 XIII（もぐら通信第95号）より引用します：

リルケは「そのように現世でのわたしたち人間がある中で、オルフェウスに向かって話者が、「傾きの王国」にいなさいとは何をいつているのでしょうか。Neige、傾きという言葉には、また減少、衰弱、衰微という意味もありますので、その中に生きて、その生を王国となしなさいという意味にとることにします。王国になるのは、第1連の冬にそうであるように、überstehen、ユーパーシュテーエン、堪えるということによつてです。」

これが、何故安部公房の箱根の仕事場の山荘が急な斜面(ナイゲ)に存在してゐるかといふ理由であり、私が、あの山荘を、奉天の安部公房の子供部屋と同じく、存在の部屋と呼ぶ理由です。二つの部屋は差異に、ある。即ち、超越論の世界です。「安部公房の箱根の仕事場とご轟頂のレストラン「ブライト」を尋ねる~存在の部屋と『もぐら日記』の中のレストラン~」（もぐら通信第49号）号に仕事場探訪記を掲載しましたので、ご興味のあるかたはご覧下さい。

この斜面は、これ以外にもリルケの他の『形象詩集』の中でも何度も歌はれてゐる。詩人が斜面といふ言葉を一度概念化したら、他のどんな文脈でも斜面はこの意味なのです。これは安部公房の場合も同じです。このやうないくつもある概念に基づいて自分の世界を創造するのです。」

また、箱男の中の貝殻草の次の描写をお読みください。やはり斜面が存在の存在する場所、即ち上下、天地の垂直方向の差異のある場所なのです。「周辺飛行」論（5）：3。「周辺飛行」について（2）2：『ところで君は一周辺飛行2』（もぐら通信第92号）より引用します。

「貝殻草といふ《貝殻草》は「この海辺の石垣の斜面の、隙間と言う隙間」に文字通りに存在してゐる。斜面であるのは、このエッセイの最後の段落の猫が生きた生身の猫ではなく、安部公房が東欧旅行の折に一人娘ねりさんにお土産にしようとした玩具の猫であつて、そして「玩具の猫は言語である、といふことになります。この猫は現実の時間の断層であり断面である斜面を転がつて、言語的に多次元的な諸相を写し映すものである、そのやうな写像の対象となる投影体である」からです。

この時間の斜面にある断層は『デンドロカカリヤ』のコモン君が植物に変形するに際して地球の大振動と共に露はになる斜面の断層と同じです。即ち「この海辺の石垣の斜面の、隙間と言う隙間」の「隙間と言う隙間」は、コモン君にとつての断層に等しいのです。コモン君ついでに言ひますと、「線香花火のような棘だらけの葉」といはれてゐる此の葉つばの様子は同じ『デンドロカカリヤ』の中に引用されてゐる次のリルケの詩句を思はせるものがあります。かうして「周辺飛行」に、従つて『箱男』に依然としてリルケは生きてゐるのです。「ただ、この世のはかなさをすごすためなら何故？とりわけほの暗い緑の中で[註4]葉の緑々に小さな波形を刻む月桂の樹であつてはならないのか？」（リルケの『ドゥイーノの悲歌』の9番の詩より）」

また『箱男』の《安全装置をとりあえず》から当該箇所を：

「ちょうどいま、運河をまたぐ県道三号線の橋の下で、雨宿りしながらこのノートを書きすすめているところだ。」

（全集第24巻、22ページ上段）

2. 例2：「出来れば、急行の停車駅でもひかえた、繁華街の一角。」

例へば『密会』から：

「しかし[引用者：病院の内部からみた外部の]通りの光景は、むしろ普通の街の印象に近い。一見して病院の別館か検査室と分かる建物もあるが、隣り合わせにありふれた雑貨屋やカメラ店などが並んでいたりする。病院に街がまぎれ込んでいるのか、街に病院が割り込んでいるのか、見方次第でどちらにも取れそうだ。最初の交差点は、立体化されていて、下をくぐる片側二車線の大通りは、すでに上下線とも車で埋めつくされていた。たぶん病院が2つの高台にわたって拡張される以前からあった、主要幹線道路なのだろう。だが、その交差点の角にそびえている全面ガラス張りのビルになると、いったい道路側に属しているのか、それとも病院側に属しているのか、やはり迷ってしまう。最上階の窓ぎわに、〈貸しふとん〉とめだたない字体がやっと読みとれた。なるほど、大病院が相手なら、貸しふとん屋もいい商売になるだろう。やはり構内の一角とみなすべきなのかもしれない」（傍線引用者）

（全集第26巻、36ページ下段～37ページ上段）

「出来れば、急行の停車駅でもひかえた」方がいいといふのは、これが自動車道路ならば、速度の点で、「主要幹線道路」に相当する線だからであり、さうであれば其処に交差点の生まれる余地があるからです。そして此の内部に入ると箱の中の迷路である病院は「その交差点の角にそびえている」。そして、単に「全面ガラス張りのビル」だといふのであれば、これは『燃えつきた地図』の最後の電話ボックスと同じ、垂直方向に立つ透明な箱であるといふことなのであり〔註2〕、『S・カルマ氏の犯罪』の主人公S・カルマ氏が最後に飛び越える禁忌の柵たる★印の向かうの砂漠で垂直方向に果てしなく成長する壁と同じ存在の壁である病院だといふ事になり、即ち物語の冒頭に「既に」「最初から」「終りし道の標べ」が立つてゐて、読者も「終りし道の標べに」「いつの間にか」（超越論的時間）立つてゐるといふ事になります。

〔註2〕

安部公房の小説観を述べてゐる作品で、『人間そっくり』の元の短編『使者』にある主人公奈良順平が火星人だと自称する男と会話をしながら心の中で思ふ論理を見てみませう。

「……気違いだとすると、こいつは相当によく出来た気違いだよ。だが待てよ、もし本物の気違いなら、この話はそのまま使ってもかまわないだろうな。これが使えるとなると、今日の馬鹿気た手違いも、まんざらではなかったということになる。さっそく今日の講演に拝借してやるか……うん、ちょっとした風刺もあるし、なかなか悪くなさそうぞ……題は「偽火星人」……通俗的すぎるかな？「箱の中の論理」というのはどうだろう？いや、ちょっと高級すぎるよ。なにかその中間くらいのを考えてみることにしよう……」（『使者』全集第9巻、306ページ下段～307ページ上段）（傍線筆者）

この同じ「箱の中の論理」、即ち後年の『箱男』の論理をtopology（位相幾何学）との関係で、本物と偽物、この論考でいふ真獣類と有袋類の関係を、人間と人間そっくりの関係の問題として解を種明かしとして説明してゐる箇所が、前者、即ち『人間そっくり』に書かれてゐます。即ち『箱男』はtopologyで解読することができるのです。即ち、このことは、『箱男』のみならず、全ての安部公房の作品は、接続と変形といふ視点から解読することができるといふことを意味してゐます。〔註11〕

〔註11〕

Topologyと存在概念については、『存在とは何か～安部公房をよりよく理解するために～』（もぐら通信第41号）をご覧ください。

3。例3：「車道が地下にもぐっている、切通しの上の歩道ぎわ。」

例へば『密会』の上記2に傍線を付した「病院が2つの高台にわたって拡張される以前からあった、主要幹線道路」を同じ例として挙げる事にします。

4。例4：「頭上の水銀燈が、ひときわ明るくその部分だけを際立たせているような場所。」

この例は『燃えつきた地図』の最初と最後に出てくる水銀燈を挙げればよろしいでせう。

最初の例：主人公が依頼人の家を辞したあとの次の光景。

「暗い道……暗すぎる道……ついさっきまでは、乳色の空につながる、白すぎる道だったのに、いまは街々の灯にそまった空の底に沈んだ、谷底の道……水銀燈から、十歩あるいて、靴先でマンホールの蓋をさぐり当てる……ちょうど、「彼」の足取りが消えたらしい、そのあたり……」（全集第21巻、125ページ上段）

最後の例：主人公が「カーブの向う」に存在し且つ存在してみない町をみるところ。

「にもかかわらず、ぼくの町は消えてしまったのだ。やはりあのカーブは、超えるべきではなかったのかもしれない。カーブの向うに辿り着くことは、これで永久に不可能になってしまったのだ。白い水銀燈の遠近法。人足ごとに透明になっていく、帰りを急ぐ人々の群……」（全集第24巻、308ページ下段）

「人足ごとに透明になっていく、帰りを急ぐ人々の群……」も最後に必ず現はれる存在の透明感覚です。読者は『方舟さくら丸』の最後の情景を思ひ浮かべることです。

そして、「ぼくがBを見つけたのも、ちょうどそんな場所だった。」といふことであれば、この「周辺飛行」もまた「終りし道の標べに」から始まつてみるのです。つまり、存在の十字路で安部公房の物語は例外なく始まるのですから、誰が読んでも、知つても知らなくても、話は終わりから始まるのです。このアベコベの世界がアベコーボーの世界であり、topologyの世界です。安部公房の小説を読むことは、あなたの人生を終りから始める事に等しい。そして、この「周辺飛行」の案内人は、「Bは路上ではじめて箱男C」を見掛けた」といふ此の箱男Cであるのです。

「いや、見掛けたのではなく、とつぜん開眼して、見えるようになったと言うべきだろう」とありますので、これは垂直に立てた箱であり最後にある箱ですから、『燃えつきた地図』の電話ボックスと同じで透明な存在の箱に違ひなく、さうであれば、存在といふ透明なるものが見えるやうになったのですから、それは「とつぜん開眼」したといふことは、その通りでありませう。時間の中での因果律に支配されない超越論的な契機が箱男Bに訪れたのです。

となると、これもtopologyの論理の常で、安部公房の登場人物の此の二人は余白と沈黙の隙間で攻守所を交換する、或ひは主観と客観、主体と客体、主語と目的語、これらいずれもsubjectとobjectであるものを等価交換する事になります。その契機はどの一行に潜む（ひそ）んであるのかと目を凝らして読みますと、その契機は2つありました。

一つ目の契機は、朝の景色の時間の色調、即ち夜と朝の時間の隙間の、人間がみなくなつて無人になり、国家と社会に対して無登録になる透明な青い色調へと移つて、「天がほとんど重さのない青だけになり〔註3〕、とつぜん視界から、すべての人影が消えうせる」ことの中で、箱男Bが、「誰でもないと言う事は、誰でもありうるのと同じことだから」「何処かの街角に姿を現す者がいるとしたら」その男が、箱男Cであるのみならず、存在の交差点に

立つ世界中の箱男全体になつて、箱男が遍在するといふ契機です。安部公房は超越論であり汎神論的存在論ですから、必ず此の「直接観察の対象となっていないが、あらゆる場面につねに君臨している、特権的重症患者一名」即ち《弱者》に一度なつて〔註4〕、あらゆる隙間といふ隙間に遍在する必要が、箱男Bは、あるのです。

〔註3〕

緑色については『もぐら感覚21:緑色』（もぐら通信第25号）および『もぐら感覚21:緑色(2)』（もぐら通信第26号）を参照ください。詳細に論じました。

〔註4〕

《弱者》の《 》に関し、安部公房の存在論の複数の記号の持つ意味については、初期安部公房論である『安部公房の初期作品に頻出する「転身」といふ語について』（もぐら通信第56号から第59号）をお読みください。詳細に論証しました。

この箱男Bが目撃する、この夜明け前の透明な青い時間の中で配達に出発する新聞配達店のトラックに積まれてゐる新聞は勿論いふまでもなく「明日の新聞」です。

「いま、近くの新聞配達店の前から、青い小型トラックが、朝刊の最終版の包みを下しおえて発車した。」

さうして、この透明な青い無人の時間の次に、二つ目の契機が、この《弱者》である箱男Bならぬ箱男B〔ここで二項対立が否定されて、箱男Bであり且つ箱男Bではない箱男に変形してゐる事にご注意〕への襲撃者の出現です。この《弱者》である箱男Bならぬ箱男Bを火搔棒攻で攻撃する襲撃者が出現して、箱男Bは予（かね）て用意の鰐の縫いぐるみに砂を詰めた「手製のブラック・ジャック」で反撃をする。そして、この攻撃と防御の関係にある二者の戦ひが、やはり存在論の記号（ ）の中に書かれてゐる事によつて、次のやうな、丁度『名もなき夜のために』の最後に此の存在論の（ ）があつて二項対立を超越した第三項である存在の世界を意味するやうに、この（ ）の密かに示す沈黙と余白の中で二者は等価交換されて、安部公房の理論（theory：セオリー）通りに、加害者・被害者の二項対立が否定されて、箱男Bの究極の自己の反照である第三の客観、即ち存在自体に箱男Bは最後になるわけです〔註5〕。ここに於いて、箱男Bなる箱男は、存在の出現と観る事と存在自体になる事とが一体になる事によつて、この閉鎖空間から脱出するのです。

〔註5〕

これは、『〈これはある職業的關係によつて〉一周辺飛行5』に登場した、遍在する《弱者》即ち箱男と同じ形象（イメージ）です。

この論理は、十代後半から20代初にかけて安部公房の名付けた新象徴主義哲学といふ此の哲学ですが、これは『詩と詩人（意識と無意識）』に拠つて簡潔に言へば、二項対立の両極

端の項を否定して、自己喪失による記憶の喪失を代償に（この否定の中に自分自身の否定を、この否定とは自己喪失と記憶喪失と意識喪失のことにほかなりませんが、このような否定を含むといふことです）、果てしない垂直方向（時間の存在しない方向）に次元展開を繰り返した果ての究極に観る（自己の反照としての）第三の客観、即ち存在の創造をするといふ方法論でありました。ここで

- (1) 観ること
- (2) 自分自身が存在になること
- (3) 存在自体の出現

これら三つが一つになつてみます [註6]。ここにも3といふ数字があります。

安部公房の、これが創作の秘密であり、一生を貫く創作のための方法論です。これは、コンピュータの基礎であるブール代数による二進数の論理演算の論理によれば、否定論理積といふ論理に当たります。これが、一生の安部公房の生きる論理であり、安部公房の「現代の実存哲学とは一寸異つた実存哲学」であるのです。

[註6]

- (1) 観ること

これもリルケに学んだ事です。以下中埜肇宛書簡より引用します：

「中埜君、御變りありませんか。昨日やつと旅行から歸つて参りました。永い旅でした。丁度リルケがロダンから學んだ如く、僕もリルケから「先ず見る事」を學びました。」（『中埜肇宛書簡第5信』全集第1巻、92ページ）

安部公房の詩に『観る男』といふ詩がある。（全集第1巻、133ページ）ここには、既に「明日の新聞」が「書き了へた」「未来の日記」とし出てくる。

また、汎神論的存在論の形象（イメージ）が、後年の海や洪水などに通ずるものとして、次のやうに歌はれてゐる。

「此の果てしない存在にとりかこまれて、あふれ出た透明な涙を両手に受けるのは……？唯一未来の日記を書き了へた時に……。」

此の詩には、これ以外にも、転身、沈黙、「僕の中の「僕」」の話法、出発、忘却といふ、安部公房文学にとつて本質的な用語が書かれてゐる。

- (2) 自分自身が存在になること

「詩人、若しくは作家として生きる事は、やはり僕には宿命的なものです。ペンを捨てて生きるという事は、恐らく僕を無意味な狂人に了らせはしまいかと思います。勿論、僕自身としては、どんな生き方をしても、完全な存在自体——愚かな表現ですけれど——であればよいのですが、唯その為に、僕としては、仕事として制作と言ふ事が必要なのです。これが僕の仕事であり、労働です。」

（『中埜肇宛書簡第8信』（1946年12月23日付）、全集第1巻 188ページ下段）」

(3) 存在自体の出現

『詩と詩人（意識と無意識）』より引用します。ここでいふ第三の客観こそが、安部公房のすべての主人公の最後に観る究極の存在のことなのです：

「諸々の声は吾等の魂が夜の本質にふれた所から始まる。それが様々な次元に展開されて言葉となる。それは自己否定＝自己超越の形を以て意識の中に捉えられる。物それ自体、云い代えれば夜の直覚が展開する自体として或種の象徴的予感を産みつける。その中にこそ実存的意義を失わない、客観なる言葉を生み出した本源的な内面的統一に反しない、第三の客観が視視されるのではないだろうか。

如何なる表現も主観を通してのみなされ得ると云う事は明かである。主観的体験のみがあらゆる意識を言葉たらしめるのである。そして当然、生存者としての人間各個の内面的展開次元の相異に従って、その言葉の重さ（含まれている次元数）の相異が考えられる。主観はその魂の夜の本質にふれる程度によって様々な重さを持つ。

では此の主観のつもり行く次元展開の究極は、一体何を意味するのであろうか。その時人間の魂は限りない夜への切迫を体験するのである。夜の直覚は単なる概念ではなく、行為・体験・方法の中に現実的な姿を表すのである。そして、此の永遠の距離を以てはるかへだたっている究極を、吾等は第三の客観として定義する事は出来ぬものであろうか。」

（全集第1巻、107ページ）」

さて、存在論の（ ）の沈黙と余白の中の箱男Bの襲撃者の話の前置きが長くなりましたが、しかし、以上のことを知る事によつて、次の言葉の意味がよく理解されるでせう。

（だが、それからの数秒間に展開された、Bと襲撃者の争いについての詳細は、あえて書かすにおくことにする。なにぶん、まったく人気のない場所で行われたことだし、当事者以外には分かるはずもない。何かが行われ、何かが行われなかった。そして約十八秒が経過する。）

〔傍線引用者〕〔全集第23巻、394ページ下段〕

「そして約十八秒が経過する」とは、講釈師見てきたやうな嘘を言ひ、といふ事ではありますが、一体誰がストップウォッチを手に時間の経過を測定してゐるのであろうか、さう、書き手である安部公房の意識も登場人物たちと一緒にストップウォッチを手に遍在してゐるので。そして、かく此の「周辺飛行」の文章を読む読者の意識もまた同様に。

さて、この決着した勝負の末に、一体この二者はどうなつたか。この二者は二つの者ではなくなつてゐるわけですから、当然に、自分が自分自身の姿を再帰的に目撃するといふ、次のやうな話になるのです。依然として此れは「切通し」と「上の車道」の交差点の下に存在する存在の十字路で起きてゐる話です。従ひ、どちらが箱男Bでどちらが襲撃者なのかは不明です。どちらもどちらであり、どちらもどちらではないといふ安部公房一流の多項否定論理積の論理、即ち、

〔（箱男Bであり且つ箱男Bではなく）且つ（加害者であり且つ加害者ではなく）且つ（被害者であり且つ被害者ではなく）且つ（加害者ではなく且つ被害者ではない）〕

といふ多項否定的積算の関係が、ここで或る値または価値として成り立つてゐる。以下の引用でお判りのやうに、数学に長けた安部公房は論理的な計算をしながら日本語の文章を書いてゐる。逆にいふと、安部公房が文章を書くといふことは、頭の中での論理的な計算の次第と結果たる値を算出して、この二つを自然言語の文字で表すことであつたといふ事が出来ます。こんな作家は他にはゐないでせう。

「どうやら勝負はついたらしい。切通しにそつて、いま上の車道を足早に渡りかけている。箱男の後ろ姿。襲撃者の姿は、何処にも見当らない。ついさっきまで箱男が掛けていた、わずかに段違いになつた歩道の縁石のあたりに、重ねた古新聞が数枚、しわだらけになつて残つてゐる。ついでに、そこまで行って、鉄柵ごしに切通しの下をのぞいてみよう。案のじやう、消えたもう一人の姿がそこにある。これは幼稚園の子どもにだつて出来る、簡単な引き算だ。下の男は、車道の端にうつぶせになつて倒れてゐる。(略)影のない夜明けの光の中で身じろぎもしない。」

さて、この死体は二者のうちどちらなのか？しかし、

「ところで、やっかいなのは、ここから先の計算だ。いったい、どつちが死んで、どつちが生き残つたのだろう。」と話者は問ふのです。この問いに対する答へは、既に「周辺飛行4ー自己犠牲」で読んだやうに、三者が互ひに互ひを互ひのために自己犠牲による自らの自殺ならざる死によつて食用としての人肉に供するといふ動機と目的によつて、一人だけ陸地に生きて帰還しても、この生き残りの者は加害者でも被害者でもないといふことは明らかであるので、法律で裁くことはできないといふ答へであり、実際に此の「周辺飛行13」も、三者間ではなく二者間で同じ結末になつてゐます。

「仮にこの切通しの下死体を、失敗した襲撃者だとすれば、いま立ち去つて行つた箱男は、縫いぐるみの鱈で逆襲に成功したBだということになり、べつに問題はなさそうだ。」

「では、反対に、殺されたのがBの方だつたら場合には、どういう事になるのだろう。あいにく、事情はまったく変らないのだ。原因不明の事故により、ごくありふれた変死体、前には彼を守つてくれた同じ条件が、今度は彼を見殺しにする。箱男に化けた襲撃者は、一見して箱男だというだけで、無事容疑者リストから除外してもらえるのだ。たしかに箱は理想の避難所である。箱の外見に変化がないかぎり、内容にどんな変更があろうと、同じ箱男で通用してしまう。本来箱男殺しは、完全犯罪なのだ。そしてBは何時までたつてもBなのである。」

アガサ・クリスティの傑作の一つに『オリエント急行殺人事件』といふ作品があります。この殺人事件の犯人は、或る一両の列車といふ箱に乗り合はせてゐた乗客全員が犯人であつたといふもですが、安部公房の箱男B殺人事件は、この箱の内部と外部を等価交換して、或る一両の列車といふ箱に乗り合はせてゐた乗客全員が犯人ではないといふ論理ですから、即ち何

故なら箱に乗り合はせてみた乗客全員が箱男Bになつてみたからです。といふわけで、「本来箱男殺しは、完全犯罪なのだ。そしてBは何時までたってもBなのである。」

これが、世に名高い『箱男殺人事件』の事と次第の顛末といふわけです。

それでは、存在の名探偵たる鷹エルキュール・ポアロは何処にありや？と問ふと、犯人即ち名探偵といふ事になつて、あのガストン・ルルーの傑作『黄色い部屋の謎』も黄色ではなく真つ青になるといふのは、同時に（同時にとは何か？です）犯人ではない者即ち名探偵ではない者といふ事になつて、鷹エルキュール・ポアロは此の論理の隙間に遍在するといふ事になり、結局は安部公房のいふ「直接観察の対象となっていないが、あらゆる場面につねに君臨している、特権的重症患者一名」即ち《弱者》こそが、鷹エルキュール・ポアロに他ならないといふ、一席のお粗末。

しかし、また、かく思へば、この論理は、これも傑作短編『無関係な死』で主人公が、自分の部屋の空間に或る夜帰宅すると転がつてみた無名無登録の死体は自分の犯罪ではなく、従ひ自分に罪はないといふことを証明するために、部屋の床に一点凝固した血痕を消さうとして床のすべての色彩を脱色しなければならなくなるまでの間に苦惱してああでもないかうでもない展開してやはり同様に朝を迎へるといふ結末に至るまでの論理と同じである事に気が付きます。

「周辺飛行13」を読んで、『無関係な死』を、この際読むのも一興かと存ずる。

By・Way

——『第四間氷期』について

草下英明

最初に「第四間氷期」という表題について、やはり氷期、又は氷河期と呼ばれる地球現象を正しく理解しておく必要があるかと思う。（正直に言って、私などは、間氷期よりも氷期の方がはるかに興味があるのだ。）地球は、その過去の長い歴史の中で、何回か非常に寒冷な気候状態に置かれたことが、地質学の研究から分かっている。私達がよくいう氷期とは、実は五〇億年の地球の歴史の最後の一ページ（このページはもちろんめくられてゆくのだが）に相当する、ここ百万年位の間の出来事である。もっと以前にも、氷期はちゃんとあって、古い所では先カンブリア期（つまり古生代より前）の、今から十五億年ほど昔にもあったし、中部ヨーロッパにアルプス山脈が造りあげられた新生代の始め頃（六千万年前）にも起った証拠がある。しかし、私達がはっきりとした氷期の痕跡や年代を知ることが出来るのは、ごく最近、地質系統でいうと、第四紀洪積世から沖積世に起ったもので、ふつう氷河期又は氷河時代といえ、これを指すものと考えてよろしい。

十八世紀から十九世紀にかけて、中部ヨーロッパ、スカンジナビア半島、アルプス地方などの山岳地帯に見られる特殊な地形が地質学者の注目を浴びた。細長く続いた丘、丘と丘の間のこれも細長いゆるやかな谷間と湖、そして丘の上などにころがっている丸い石ころ、岩石の表面につけられた擦痕などが何を意味するのかである。ほとんど全ヨーロッパの地質学者たちの協力と長い努力の積重ねによって謎は解けた。これらの地形・現象は現在はその土地に存在しない氷河が造りだしたものである。丸い石ころは、氷河が遠い山岳地帯から崩して氷の上に乗せて、運び出してきたもので、氷堆積と呼ばれる。細長い丘や湖や擦痕は、氷河の移動によって地形が削りとられて生じたのであった。ということは、かつて中部ヨーロッパ一帯が、大きな氷河、又は厚い氷の層（氷床という）におおわれていたことを証明する。しかもいくつかの堆積層の中に、氷河が四回にもわたって襲来してきたこと、その年代もかなり明確に決定出来たのである。

四回の氷期は、それぞれ調査されたアルプス地方の模式地（典型的な氷期の証拠を示すことが精査された代表的な土地）の名をとって、ギュンツ、ミンデル、リス、ウルム（ビュルムと発音する人もあり）と名付けられている。最初のギュンツ氷期は六〇万年ほど前に始まり、約三万年ほど続いたらしい。そのあと、約十万年の間かくをおいて、第二回目のミンデル氷期がやってくる。このギュンツ、ミンデル氷期の中間の十万年を第一間氷期と名付けている。つまり氷期と氷期の間という文字通りの意味である。ミンデル氷期は、六万～八万年ほど続いたが、これは四回の氷期の中でもともと強烈なもので、全地球上の三分の一位が厚い氷床の下に閉ざされ、現在のロンドン、ニューヨークは

完全に氷におおわれていたと考えられる。次いで十八万年というかなり長い第二間氷期がやってくる。三回目はリス氷期と呼ばれて、六万年ほど続いている。更に第三間氷期が五、六万年ほどあり、最後の第四間氷期、ウルム氷期がやってくる。

ウルム氷期は今から十二万年前ぐらいに始まり、一万年ぐらいの小氷期という間かくを置いて三回の波がおそっている。一ばん最後は三万二千年から一万八千年前まで、つまり地球上の人類がネアンデルタール人から、クロマニヨン人（現代人と同じ）に交替する時期にやってきた。ウルム氷期全体としては約十万年もの間（この期間やや明確でない）地球上をふるえあがらせていたのである。

今から一万年ほど昔、ウルム氷期は終って、地球は未だ氷期の痛手から抜けきれない後氷期の時代に入っている。もう氷期は完全に終わっているという人もあり、未だだという人もいるが、ともかく第四回目の間氷期にあることは確かだ。つまり「第四間氷期」（イコール現代）がまさに私達を取巻いているというわけだ。

こうした氷期（氷河期又は氷河時代という人もあるが、氷河必ずしも氷期を代表しているとはいえないので、氷期という方が妥当である）が一体どういう原因で地球をおそうのかは、地球物理学上の大問題、大きな謎のテーマになっている。今だにハッキリした説明はなされていないために、SF的な発想の好餌にもされているようだ。そのいくつかを紹介してみると、

一、太陽の放射量の変化が、一つの有力な原因と見られる。地球の大親である太陽は、莫大な量のエネルギーを地球に送りどけてきているが、まさに「太陽がくしゃみをすれば、地球は風邪を引く」状況にある。太陽エネルギーの放射量が1%変化したとしても、それは巨大な見返りとなって地球にはねかえる。太陽自体は十一年の周期で黒点が増減し、明らかに太陽面活動が変化する一種の変光星といえる。氷期はもっと周期の長い、もっと大きな振幅を持った大量エネルギーの変化が原因しているというのだ。太陽エネルギー説は、すでに十九世紀末ミランコビッチが唱えて以来、今でもかなり有力である。

二、最近では原因は太陽自体ではなく、太陽がその空間運動の中でしばしば濃い宇宙塵の中に入りこみ、このため放射量が減ったとする新説も現れている。宇宙塵といっても、歴大なひろがりを持つガスや塵の塊りで、オリオンの大星雲とか暗黒星雲などを形成する物質と同じで、太陽がその中を通り抜けてしまうのに何万年もかかるという代物だ。これが太陽の放射量を減退させる犯人であるというわけだ。但し、この説を直接実証する明白な手掛りはないのである。

三、地球の自転軸の変化があったのではないかという説。地球の北極は、現在は北氷洋という海の真中にあるが、これがときどき、移動して大陸の中央部にやってくるため、陸地のほとんどが極寒の地域になってしまう。但しこの説も自転軸をそのように移動させる要因については説明不足である。

四、地球自体の熱量不足による冷えこみ。地球の歴史をよくよく調べてみると、氷期は第四紀ばかりでなく襲ってきているが、いずれも非常に大きな造山活動に伴って起っている。たとえば古生代末期、石炭紀と二畳紀の間でばバリスカン造山活動という中部ヨーロッパ一帯を揺り動かした大活動のさ中に、氷期が一回訪れており、ヨーロッパ・アルプスを造ったアルプス造山活動の最終に一回、そしてその終りにも氷期が襲っている。（これが第四紀の四回の氷期の始まりに相当する）つまり、巨大な山脈を形成する地殻の大変動が行われた場合、地球もまた内部からエネルギーを放射して、地熱を大きく低下させ、このため地表の温度も下げるという考えである。この説が氷期の説明としては現在もっとも有力であるとされている。

では、今後地球は一体どうなるのか。ウルム氷期は一応終りを告げて約一万年近くが立っている。第四間氷期は未だ当分の間続くのであろうか。それとも間も無く第五回目の氷期は訪れるのであろうか。これは誠に興味あるテーマだが、「第四間氷期」ではそれがもう来ないであろうことを示唆している。地球の海水面は猛烈な海底火山の活動による水蒸気の放出によって増量し、六十メートルも上昇してしまうというのが作者の予測——いや、コンピューターのモスクワ三号だかの予想であった。

これも実は二通りの考え方がある。地球はもう既に冷えつつある。その証拠は異常気象の面にいくらかでも現れていると主張する人がいる。ヨーロッパ地方に非常な寒冷がしばしば襲って、夏季の寒冷化が進んでおり、スピッツベルゲン島周辺が氷に閉ざされ、白熊が北氷洋やグリーンランドのあたりからのそのそ歩いてくるといった現象が見られる。つまり次の氷期から小氷期が目前に迫ってきているような意見を持つ人もある。

全く正反対に、もはや地球上に氷期はやって来ないとほとんど断言する人もある。その危険は、即ち動物の呼吸作用や公害の結果、炭酸ガスやチリ、ホコリが地球大気の中に外套のような膜を作り、太陽からの熱を温室効果によって蓄熱することにあるという。つまり温室と同じ様に地球の大気を暖めている太陽熱をそのまま地表近くに貯めこんで外部へ放出しない働きによって、地球全体は急速に暖りつつある。この傾向は、人類のあらゆる生産活動が行われる限り、元へ戻ることはないと考えられる。このままゆけば、五十年もたつと炭酸ガスは二倍になり、地球全体の平均気温は二度近く上昇する。北氷洋やグリーンランド、シベリア北部、南極大陸をおおう氷はすべて溶けはじめて海水面は上ってくる。地球上の陸地をおおう万年氷（北氷洋の氷は水に浮いているだけなので溶けても海水の量を増すことにはならない）がすべて溶解したとすれば、海水面は現在より四十～六十メートル上昇する。東京都の大半は水没し、農耕に適した平野の多くが使い物にならなくなり、また気温の上昇は、熱帯地方の乾燥地を拡大させて、深刻な食料危機（人口ももちろんうんと増えている筈だから）が訪れ、まさに「第四間氷期」のラストシーンに近い危機がやってくるといふ。（ギュンツ、ミンデル間氷期にはまさしく海水面が現在より六十メートル高かったという証拠がある）私としては、どうも寒くなるより、暑くなる方が可能性が高いと思っているが……。



アラスカ、バーナード河

う証拠がある) 私としては、どうも寒くなるより、暑くなる方が可能性が高いと思っっているが……。
さて「第四間氷期」を読み直してみ、気が付いた点をいくつか挙げてみる。

〈氷期の氷襲表〉

100,000年	57,000年	50,000年	42,000年	24,000年	18,000年	現代
3万年	約9万年	6万年	12万年	6-7万年	1万-8千	現代
(ギユンプ氷期)	(第一間氷期)	(ミンデル氷期)	(第二間氷期)	(リス氷期)	(第三間氷期)	(第四間氷期)
						(後氷期)
						(ウルム氷期)
						①
						②
						③
						?
						?
						(第五間氷期)

その一つ、日本文から翻訳された洋書を並べている本屋の書棚に、Kobo Abeという作家の名が非常によく目立つ。字数も手頃で覚えやすいのだろうか、或る席で会った東欧の文化人は、Koboの本を読んだ、Koboはいい作家だと強調していた。Kobo氏には申し訳ないが、ずいぶん名前得しているのではないかと。Yukio Mishimaとか、Yasunari Kawabataとか、Junichiro Tanizakiなどの読みずらく、覚えにくい作家の名より大変に受け入れやすいのであろうかと拝察する。特に東欧圏やソヴィエトに知名度が高いのも、Kobo Abeの威力が強いと考えている。(勿論、その作家に実力以上の評価を与えられているなどと説く気は毛頭ないのであるが、こうした附随要素は無視出来ない)

さて「第四間氷期」を読み返してみ、気が付いた点をいくつか挙げてみる。

その一つ、日本文から翻訳された洋書を並べている本屋の書棚に、Kobo Abeという作家の名が非常によく目立つ。字数も手頃で覚えやすいのだろうか、或る席で会った東欧の文化人は、Koboの本を読んだ、Koboはいい作家だと強調していた。Kobo氏には申し訳ないが、ずいぶん名前得しているのではないかと思う。Yukio Mishimaとか、Yasunari Kawabataとか、Junichiro Tanizakiなどの読みずらく、覚えにくい作家の名より大変に受け入れやすいのであろうかと拝察する。特に東欧圏やソヴィエトに知名度が高いのも、Kobo Abeの威力が強いと考えている。(勿論、その作家に実力以上の評価を与えられているなどと説く気は毛頭ないのであるが、こうした附随要素は無視出来ない)

もう一つ、気が付いたことは「第四間氷期」という表題の謎が解けるのが、なんと作品は雑誌に九回連載だったそうだが、実に七回を過ぎるまで読者は多分、「第四間氷期」の意味を測りかねていたであろう。序曲の中に、その意図が窺われるという人もあろうが、時代背景も現代と飛びはなれている訳ではなく、道具立てもいわゆる世帯染みでいて、ややミステリー仕立てのSF風刺劇かとも思われる進行が、最後の部分（私の読んだ単行本では全文二七〇頁の中の終りの四〇頁）で壮大な未来予想図に転調する。このあたりが、作者の腕の見せ所なのであろうが、よくよく見れば、その伏線は十分に示され——いや、恐らく一般の読者にはうっすらと感じられた筈だ。

たとえば、当時耳新しかったコンピューターが登場する。モスクワー、二、三号という未来予想装置が未来を予測し、死者の生前の記憶を再生させる装置までかなり精細に描かれる。アクアラング、海雪（マリンスノウ）、クロレラなどが言及されて、海底開発や水棲人の研究がほのめかされている。クロルプロマジンという薬品や、アラタ体、胎児の体外発生、生物進化生長の人工統御などの医学上の夢もちゃんと盛りまれている。地球観測年とか、太平洋海底火山帯の活動も示唆される。作者は、執筆当時、ほとんどSFというものを念頭に置いていなかった様であるが、料理の味付けや道具立てはまさしくその方向に進んでいたことは疑いない。

そこでこの作品「第四間氷期」は雑誌「世界」の一九五八年七月号から五十九年三月号に掲載された。（このことも大変重要な定義〔引用者：意義の誤植と思はれる〕があると思う。この後、「世界」は同様な傾向の作品をのせたことがあるのかどうか、多分、これ限りだったのではなかろうか）当時、SFという言葉はマスコミの中にはほとんど知られておらず、早川書房のSF専門誌「SFマガジン」が創刊されたのが、一九六〇年二月の出来事である。SFマガジンが、Kobo氏の仕事と激励によって、創刊の自信を深めたことが、当時の編集長福島正美によって語られている。SF界の動きとしては、一九五五年一月、世界空想科学小説全集二冊（クラーク「火星の砂」、アシモフ「遊星フロリナの悲劇」、室町書房）が刊行されてすぐダウンし、五十六年四月からは「最新科学小説全集」一二巻（元々社）が途中まで出て中絶した。（この中にはブラッドベリ「火星年代記」やブラウン「発狂する宇宙」などの傑作が含まれていた）五七年春には当時日本唯一のSF同人誌「宇宙塵」（柴野拓美編集）がスタートしている。SFが日本マスコミ界に定着するまでの生みの苦しみを味わっていた時期だ。

更に「第四間氷期」に影響したと思われる出来事は、一九五二年九月から五十三年九月にわたって小笠原列島南方洋上で明神礁という海底火山の活動があった。（殊に五二年九月十七日、第五海洋丸という海上保安庁の調査船が、直下爆発によって消滅している）五十六年から五七年にかけて国際地球観測年（IGY）が実施され、日本からも南極観測隊が初めて昭和基地を開設した。Kobo氏はちょうどこの頃、チェコスロバキアの作家大会に出席するため、二ヶ月ほどチェコを中心に東欧諸国を訪れている。Kobo氏

はこれより前から、フランツ・カフカ「変身」や、カレル・チャペック「山椒魚戦争」（チャペックは「ロボット」という言葉をこの作品の中に用いた最初の作家でもある）などに注目し、大きな影響を受けていたのではないかと思われる。（「第四間氷期」の発想は、明らかにチャペックの作品に刺激されていると思う）

五七年十月四日、私達の耳目を揺り動かす大事件が起った。ソヴィエトが世界最初の人工衛星スプートニク一号を地球のまわりに進空させたからだ。この事件は、それまで科学の進歩は常にアメリカがリードしていると信じていた常識を根底からくつがえすものだった。「第四間氷期」の中にもはっきりソヴィエト優位の影響が認められよう。

以上の如き背景の中で出現した「第四間氷期」は、なんといっても日本に於けるSFの先駆的作品（本人はなんと思っけていても）であることを否定し得ないし、東欧文学の影響を受けた珍しい作品でもある。そこで「第四間氷期」という、表題に戻って考えれば、作品の意図は明かに、純粋な科学研究が政治の力で、一般国民の全く預かり知らない部分でねじまげられ、未来予測や人間改造に応用され操られている恐怖を描くことにあるようだ。たとえそれが全陸地の水没という避けがたい破滅から人類を救うためであっても、為政者の匙加減一つで悪用され弊害を蒔き散らす危険をはらんだものであることを鋭く指摘している。とすれば、この表題は「第四間氷期」でなくても差支えなかったのだと分かってくる。これは現代（つまり第四間氷期）の中で、いつでも何処でも起り得る恐怖であることを暗示しているのだ。実際に第四間氷期に関連する事実が読者に呈示されるのが、遅過ぎることはなかったのだ。

最後に作品の中の一部を要約して引用しておく、水棲人間計画の主任山本博士の言である。

——自然との闘いが、生物を進化させたことは確かだ。四つの氷期と三つの間氷期が、人間をオーストラロピテクスから現代人にまで進化させたのも事実だ。誰だったか、人間というやつは、氷河という魔法のハンカチから生まれた生徒だなどと、うまいこと言った人がいる。しかし人類はついに自然を征服し、ほとんどの自然物を野生から人工的なものへと改良してしまった。つまり進化を偶発的なものから意識的なものに変える力を獲得したわけだ。そこで生物が海から陸に這い上がった目的も、もう終わったと考えられはしないか。昔のレンズは磨かなければならなかったが、今のプラスチック・レンズは、はじめからつややかだ。もはや艱難辛苦を玉にするという時代ではない。

これはこの作品の発表から二十年近くたった今日を、まさしく洞察しているといつてよかろう。いずれにせよ、私たちは、Kobo氏のいう「第四間氷期」の中で、操られた存在に終るか終らないかが、人類の運命を左右する重大な引き金となっていることを思い知るべきであろう。（原文は傍線は傍点）

安部公房の発明空間とファシズム

岩田英哉

目次

1. 安部公房の発明空間とファシズム
2. 言語論といふ毒（問題下降の毒）

1. 安部公房の発明空間とファシズム

1969年の『ユリイカ』（昭和44年8月号）で埴谷雄高が安部公房について、次のように語っていることは、全く安部公房の文学の本質を言い当てている。

何よりも、この短いエッセイの題名が『安部公房の発明空間』というのである。

安部公房の発想は、全く発明家や起業家の発想と同じです。発明家や起業家が、何か新しい発明の着想を得たり、また新しいビジネスモデルを着想して商売に乗り出すそのそもその発想は、時間の無化に依るからです。

時間の無化というと何か難しいことのように思われるかも知れませんが、実はそうではなく、例えば安部公房が『第四間氷期』のコンピュータの未来予言の根底にある論理がそうであるように、今この現在という時間を捨象して、それが無いものと思い（これが無化ということ）、即ち英語でいうならば非現実話法で、ドイツ語でいうならば接続法II式という、ともに過去形から創造する時間の無い主文と従属文を生成するということなのです。

今これこれのものは存在しないが、しかし、もしそれが存在していたとしたら、一体社会はどのように変わるだろうか、と考えるのです。

英語の授業で典型的に教わったような、次の文を思い出してください。この文には時間が無いのです。そして、この文は過去形から生成されるのです。

If I were a bird, I would fly to you.

即ち、現在を、未来から見た過去と考え、現在を過去から見た未来とすること、そして、一次元に並んでいるどの時間も、このように考えて交換関係の中に置くこと。

これが、安部公房の発明家としての発想のもとになっている論理、それも時間が無いということから言っても、幾何学的な数学の論理なのです。複数の時間を無化して、捨象して、お互いに交換し、一種の構造体（モデル、模型）を創造するわけです。

わたしは現在鳥ではないので、愛するあなたのところへは飛んで行けない。これが、現実です。

しかし、もし私が鳥であったならば、わたしはあなたの所へ真っ直ぐに飛んで行くことができるのに。

実は詳細な説明は省きますが、このような文をドイツ語でKonjunktive（接続法）というように、これは英語で言うならばconjunctionという、二進数の世界の用語でいうならば論理積（conjunction）という掛け算を、わたしたちは頭の中で演算しているのです。掛け算であり、論理積でありますから、当然この思考の過程には時間は存在しないのです。これが、何故上の文が祈願文と呼ばれ、同じ形式でそのまま、命令文になるのかという理由なのです。後者の場合、わたしたちは、その命令文に時間が存在しないが故に、それが誰であれ、親であれ恋人であれ、自分の上位者だと思っている上位者の命令に、わたしたちは否応なく従うのです。

この従属接続詞を生成するif（もし～だったならば）に従属される主文と、この従属文（条件文）を否定形にして、非存在（非現実）を表すことも、勿論、できます。

この同じ論理で、安部公房が発行し、複数の作品に登場させているのが『明日の新聞』です。戯曲『友達』や『密会』にも出てまいります。

この幾何学的な安部公房の着想を、埴谷雄高は、その題名として言い当て、安部公房の「発明空間」と、その作品の世界を発明と同じ空間だと言ったのです。

「ところで、私と共通していた存在論的テーマから踏みでた安部公房の飛躍の特色は、アヴァンガルドの最初の先輩にして僚友たる岡本太郎と花田清輝の点と線と面の立ちあがり運動の広い幅をもなお遠く越えて新たな変貌へ向かって飛び続けたことに存する。

この私達から大きくかけはなれてしまったその新たな変貌とは、古い言葉でいえば、雪月花に象徴される吾国の短歌的情緒のはいりこむ一抹の余地すらまったく存せぬ幾何学的図形の極度の冷厳性、現在ふうな言葉でいえば、デジタル出現するコンピューターの無感無覚空間への敢然冷厳たる踏みこみにほかならない。そしてさらになおまた、これを最新現代風に言い換えると、モンドリアンの原始集積回路ふう図形の出発点を、超につぐ超で飛躍的に追い越してゆくところの最新空間、その冷厳な成功によって忽然たる都市の出現をもたらし、そしてまた、その冷厳たる失敗によってシリコンヴァレーの忽然たる廃墟がもたらされるどころの発明空間にほかならないのである。

安部公房は、いつてみれば或る巨大空間へと向かう途上で飛び去ったが、安部シリコンヴァレーの忽然たる出現と、また、忽然たる廃墟の深く屈折した推移の仔細については、幼年時代からコンピューターの変転する画像とともに成長してきた新しい批評家の緻密な回答を俟つべき、これからの異色ある深い分析課題である。」

「幼年時代からコンピューターの変転する画像とともに成長してきた新しい批評家の緻密な回答を俟つべき、これからの異色ある深い分析課題である」とあるのは、全くその通りだと思います。

もぐら通信（第26号）に寄稿下さった信州の中学三年生の篠子雄太さんは、まさしくこの新人の一人であると思います。そのような公房読みが育ってきていることは、埴谷雄高の予言通り、心強い限りです。

さて、期せずして、この同じユリイカの号に、巽孝之と久間十義の対談があり、この対談は全般に亘って実に、これも安部公房の文学の本質を論じていて、誠に素晴らしいものがありますので、今そのうちの、この安部公房にとって作品とは、実は発明と同じであったということを述べているところを引用して、読者の理解に供します。

「巽 たしかに、ひとつのネガティブな視点を据えれば、六〇年代から七〇年代にかけての安部公房というのは、日本的なリアリティに対する非常に尖鋭な視点を失ってゆくように見えるわけですが、今日の目でもう一度考え直してみると、それはある意味で、我々が安部公房の作品を文学として考えすぎるからじゃないか。漱石とか三島でしたら、彼らの文学研究というものが無理なく想定されるわけですが、安部公房の場合は、彼の文学作品に対応するのはひょっとしたら文芸評論でも文学研究でもないかもしれない……だから、書店でも目に見えないのかもしれない。

それは、安部公房が文学を文学としてみるというよりも、文学自体を一種の発明品、テクノロジーとして考えていたことと関係すると思います。安部公房自身、一九八六年には簡易着脱式タイヤ・チェーンで、国際発明EXPO銅賞というのを受けていますよね。彼は、文学者としてよりは発明家の視点で作品を書いていたのではないか。彼の文学作品も発明品的一种というふうに考えると、それはそのあとどんどんアップデートされリメイクされて、我々の日常的な現代文化に浸透してしまうような何かだったのかもしれない。ひとつのテクノロジーの発明者が誰だったかという固有名詞レベルのことは、我々は普段あまり考えません。それと同じことが、安部公房にもあてはまる。文学を文学として考えるタイプの作家であれば、その作者自身の固有名詞というものがついてまわるわけですが、安部公房の場合は文学を発明品として考えたがゆえに、彼自身の固有名詞みたいなものは、むしろどんどん現代文化に吞まれていった。」

ここで巽先生が発言していることは、全くその通りに安部公房の文学の本質、その文学

のあり方を指摘していると、わたしは思います。

それもこれも、すべて、言語の本質を教わった、あの無名に没することを教え、無名の人間の固有の死を教えたリルケに戻るのですし、それと同時に、安部公房が閉鎖空間と社会を見た18歳のときの『問題下降に依る肯定の批判』以来の、『問題下降に依る肯定の批判』という方法による、これをニーチェに学んでのその閉鎖空間からの永遠の出発と回帰、即ち閉鎖空間から次元上の接続空間への脱出と、そしてまた再びその閉鎖空間の出発地点へと戻って来る、この安部公房流の永劫回帰によるのです。そして、やはり仮説設定の文学を学んだ、ポーのことと、この三名の先達のことを思わずにはいられません。

仮説設定という考え方こそ、安部公房の文学を、上で述べられているように、発明品のようになっている大元の考え方であるからです。そして、安部公房が数学者であったことを忘れるわけには行きません。

さて、もうひとつ、少し長い引用になりますが、実に鋭い指摘を久間十義という作家はしております。この方も、よく安部公房を深く読んでいます方だと思いました。

それは、安部公房の言う、見かけ上のコスモポリタニズムと、それと全く裏腹にある、安部公房の持つナショナリズムの関係について喝破している、『コスモポリタニズムの逆説』と題した章での次の言葉です。

「久間 誰もが知らずにアベコーボーしている (笑) つまり物象化された安部公房現象がいまではありふれた光景になっているというのは、実際ありそうな話ですね。安部公房の文学がフォルムとして受け入れられて、無意識のうちに安部公房のフォルムをなぞるようなかたちで小説が産出されてくるというのは、これは非常に当然というか、自然なことですからね。しかし、この希薄化され、出自を忘れたアベコーボーたちは、少なくとも僕自身に強くアピールしてくるわけじゃありません。仮に、安部公房のフォルムを成り立たせているある契機みたいなものについて、彼らが非常に無意識のままであるとすれば、案外、安部公房を縮小再生産している部分があるんじゃないでしょうか。

さっきナショナリズムということをおっしゃいましたが、安部公房の提出した文学的なシェーマは、ぐるりひとひねり回ってというか、それこそ、“メビウスの輪”的にナショナリズムの問題と重なりますね。彼一流の、ある疎外された状況を観念的にズラしていく、その状況を受け入れつつ、そうじゃないんだというふうにしていく問題というのは、普通に考えたら、非常に強い権力的なバインドがあつて、我々がにつきもさつちもいかな
い時に、そのにつきもさつちもいかない中で自由を見出そうとする時に出てくる問題なわけです。例えば、特攻隊員が明日死んでいく、その死んでいく中に真の自由があるんだ
とか、そういうような言い方と重なる部分が、僕はあると思うんですよ。つまり、現実的に成就されないものを観念の中で成就するという思考パターンがあつて、安部公房は

その可能性と不可能性の両方を、彼の設定した物語構造の中で逆説的に示そうとした。それは、実際には我々はひとつじゃないのも関わらず、想像の共同体としてネイションというものを考えていくのと、ある部分では重なっている思考形態です。よくいわれるような安部公房のコスモポリタニズムとナショナリズムというのはだから鏡の裏表なんです。同じような土壌から出てくるんだけど、一方では決定的に、その共同性みたいなものを嫌い抜くというか、そういう精神のかたちを取り続けたいという思い、もう一方はその共同体のために殉じようとする。根が同じだから逆の態度もでてくるわけで、徹底した安部公房の共同体嫌悪をぼくらは額面通りに受け取るだけじゃ、大事なものを取り逃がすかもしれない。

そしてさらに言えば、そういう、現実に成就できないことを観念の世界で成就していこうという考え方というのは、一種のオポチュニズムというか、それが引き金になった政治的な熱狂へと変化しかねないものでもあるわけです。例えば経済的に非常な不況があつて、我々がそこでは物質的に自己実現できない時に、何か知らないけれども我々を熱狂させるような、非常に魅力的なものが出てきたとしたら、我々はふっともっていかれる。僕はファシズムを想定して言っているんですが、そういったものと重なってくるんじゃないか。ですから、安部公房がシェーマとして立てた問題が立ち上げる場所と、それからファシズムのようなものが---ファシズムって、べつにバカな連中が考えたバカな政治思想じゃないですからね。実は非常に魅力のあるものだと思うんですよ。---立ち上がる場所というのは似ていて……。と言うか、じっさい同じ時代に安部さんも生きていたわけですよ。そこのところを忘却して、安部公房のフォルムだけを無意識のうちに再生産したり、我々自身のリアリティを安部公房に押しつけているようなかたちで彼を消費するようになったら、それはもう少し考え直したほうがいいんじゃないかと思うことがあるんですね。」

この作家のいうことは、全くその通りです。

この言葉は、何故安部公房はあんなに繰り返し、ナチスの制服とナチスの映画を観ることが好きであったのかの十分な説明になっております。

そうして、また、この言葉は、何故安部公房が日本共産黨員になったのか、その安部公房最大の弱点を余すところなく指摘しております。

今詳細には、この発言を解説致しませんが、同じことを『もぐら感覚22：ミリタリィ・ルック』の題のもとに詳細に（もぐら通信第27号と第28号）、その10代の詩から晩年の言葉に至るまでを通覧して、論じましたので、お読み下さればと思います。安部公房がこんな人間であったかと、あなたは驚く筈です。

また、『安部公房と共産主義』（もぐら通信第29号）と題して、同じことをマルクス主

義との関係で、即ちファシズムとの関係で、また更に『[賈月報30]三浦雅士『安部公房の座標』：「安部公房の座標」から何が解るか』（もぐら通信第94号）にて同じ問題を、文明論の視点から論じましたので、ご興味のある方は、お読みください。

あなたには、安部公房のフォームを「縮小再生産」するような、安部公房の言葉の面（おもて）だけを鵜呑みにして、「安部公房のフォーム」をただ「消費」するだけの、自分の頭で考えないような読者であって欲しくはありません。

この作家のいうように、ファシズムとは、安部公房の立った同じ場所から生まれて来る、実に魅力のあるものだと、安部公房同様に、わたしもそう思っています。

追記：池田龍雄のエッセイに『詩的発明家---安部公房』がある。『芸術アヴァンギャルドの背中』（沖積舎刊）。この若き安部公房の親しき友人であった画家もまた、安部公房の発明家であることを普通によく知っていたということ、この標題は意味しています。同ジエッセイの転載が、渡辺三子さんによる郷土雑誌あさひかわへの寄稿を集めた『安部公房を語る』（あさひかわ社）の144ページにある。

2. 言語論といふ毒（問題下降の毒）

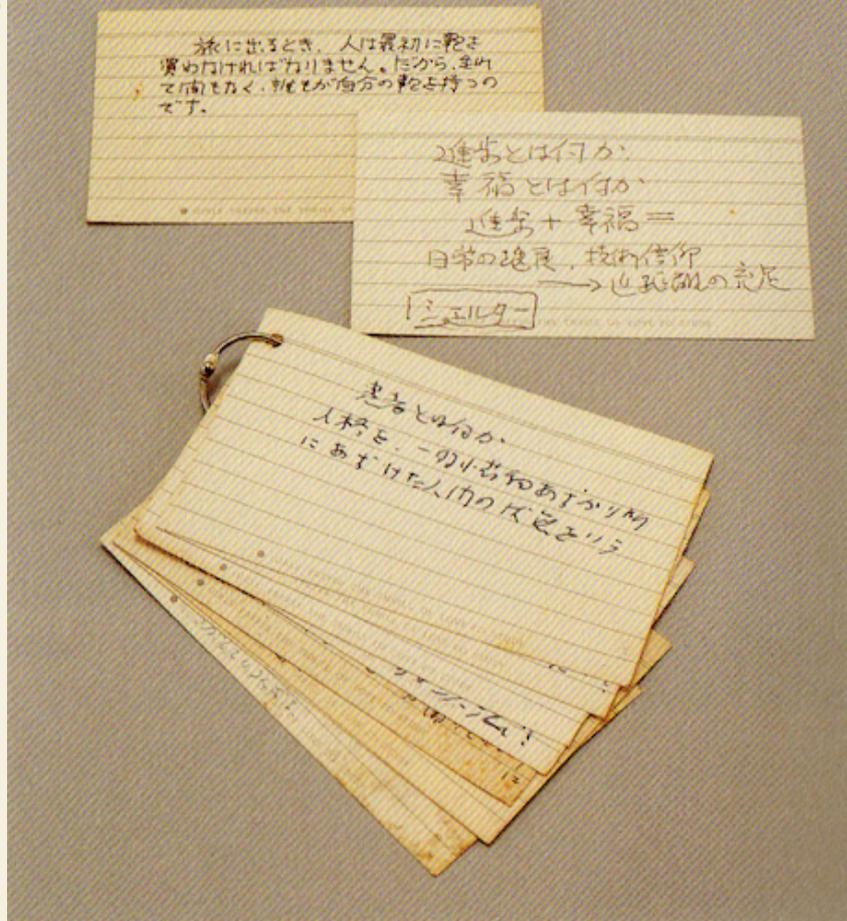
『安部公房文学の毒について～安部公房の読者のための解毒剤～』（もぐら通信第55号）より、前章に関係のある第二章の主題につき、該当する章を此処に引用して此の章の本文とします：

安部公房は、言語に関する発言をするときには、半面だけではなく、例外的に、しかし文字の上でだけではありませんが、それでも、その両面に言及します。

『問題下降に依る肯定の批判』では、問題下降のみを論じますが、他方、言語に関する話をするときには、問題下降の前にあるべき、さうして実際にあつた、問題上昇について率直に述べてをります。

それが、デジタル変換、アナログ変換といふ、安部公房の創作プロセスの一对です。

前者が問題上昇、後者が問題下降です。前者は概念化のプロセス、後者は形象化または文脈 (context) の創造です。前者は、哲学的に概念を定義し(これは論理の世界ですから時間は存在しない)、後者は、前者で定義された概念を、今度は具体的な、時間の中の物事の名前を付けて、その名前と其の名前の持つ形象との関係を接続して、確立すること、これが、安部公房のいふデジタル変換・アナログ変換です。今、前者、即ち問題上昇の好例を挙げませう。



この写真に写つてゐるカードのうち、多分『密会』を書いてゐた時に作成したものと思はれるのが、下にある金属の金環で綴られたカードの一枚めです。ここには、患者とは何かと題して、その下に患者の定義が書かれてゐます。これによれば、

患者とは、人格を、一時小荷物あずかりに所にあずけた人間の状態をいう

とあります。

人格を一時小荷物あずかり所にあずけた人間の状態になれば、誰でも患者なわけですから、確かに医者も患者になり、患者も医者になり得るのです。Superflatな安部公房の世界です。

これが、安部公房のデジタル変換の好例です。

これを概念化といひます。

結局、概念化とは、それは何か？といふ問いに答へることです。何かと問はれた其の概念を定義する。これが、問題上昇です。さうすると、これに対するに、問題下降とは、それは何々であるといふ定義に従つて形象(イメージ)豊かな、読者の生理に訴へる直喩の文体を創造するといふこと、これが、デジタル変換(問題上昇)、アナログ変換(問題下降)です。そして、これが其のまま安部公房の文体(style)の本質です。

さて、最後に、安部公房文学の持つ最大の毒のお話をします。そして、世界中の安部公房の読者は、この毒に、恐らくは例外なく、やられてゐる。それは、

言語の有する集団化の機能と個別化の機能の問題を如何に理解するか？

といふ、この、安部公房の言語機能論と安部公房文学の関係から生まれる「言語論といふ毒」についてです。これは、このまま安部公房の「クレオール論の毒」と言つても良い。

『シャーマンは祖国を歌う 儀式・言語・国家、そしてDNA』で、安部公房は言語の機能を「分化」と「集団化」といふ「《ことば》の二つの機能」に分けて説明をしてゐます。(全集第28巻、238ページ)

このエッセイは、安部公房の言語機能論を理解するためには格好の文章の一つですが、しかし、ここでも上の両面の機能については言及し、特に後者、即ち後者の「集団化」の機能については紙面を割いて詳しく論じてゐますが、しかし、他方「分化」の機能については、言葉が相対的に誠に少なく、この機能が後者の機能を備へたプログラムが閉じたプログラムであるものを、前者の機能が働くことによつて開かれたプログラムとして機能させるのだといふだけの簡潔な主張をしてをります。後者の機能を働かせる役割を演ずるのが、祖国を歌ふ儀式のシャーマンといふわけです。

「いったいシャーマンは何を歌いつづけているのでしょうか。聞き違いでなければ、ぼくにはどうも、国家のように聞こえます。あまりいい傾向ではありません。《ことば》自体は本来、分化や分業化を得意としていたはずですが、いったん「全員集合」の号令をかけると、これもまた強力な信号として働きます。」(全集第28巻、236ページ上段)

しかし、既に諸処で、また最初に安部公房の全作品との関係で『安部公房の奉天の窓の暗号を 解読する-安部公房の数学的能力について-』(もぐら通信第33号及び第33号)にて詳細に論じた通り、安部公房自身がシャーマンです。

従ひ、安部公房の読者が、上の安部公房の言葉を表面的に鵜呑みにしてしまひますと、論理の必然から言つて、安部公房の言語機能論の本質を知らずに半面だけの理解で反儀式、反国家を一知半解の状態で復唱するだけのことになるわけですから、安部公房の文学を理解することができずに、逆に其れ故に、何でも権威や権力に反対すればいいのだといふ実に短絡的な皮相的な人間になつてしまひ、自分の人生を大変貧しいものにしてしまひます。これが、安部公房の、恐らくは最大の毒でせう。

つまり、このエッセイにあることを其のまま鵜呑みにすると、国家の否定といふことになり、安部公房は左翼だといふことになって、しかも本人の言語による「存在の革命」といふ真意を周囲に全く理解されることのないまま日本共産党員になり1961年9月6日に除名されるわけですから、マルクス主義といふglobalismに感化され、日本共産党員にまではならないものの、反国家を唱へる事が安部公房の読者で在ることだといふような誤解が世間に充満することになったのが二十世紀の安部公房論でありませう。[註21]

[註21]

日本共産党員にまでなつたものですから、安部公房は二十世紀の左翼右翼といふ用語がまだ生きてゐた時には、左翼であると思はれておりましたが、しかし、安部公房は全く左翼ではありませんでした。安部公房の革命は、言語による意識の革命、即ち埴谷雄高の言葉でいふなら「存在の革命」を起こさうといふものですから、畢竟リルケに学んだ自己忘却と、またtopologyの変形の中に自分自身を入れて計算するといふ(父親安部浅吉由来の)自己犠牲の自覚、もつと言へば、自分の死を厭はないといふ覚悟を持つてゐる事が、既に当時の周囲にゐた友人知人たちは、全く異質の人間です。世紀の会主催の座談会での発言に、左翼の友人知人たちとの異質性を十分過ぎる位に読む事が出来ます。

一言で云へば、当時の左翼の若者たちは、如何に生きるべきかと問ふたのに対して、安部公房は、如何に死ぬべきかを論じてゐるのです。話が全く噛み合つてをりません。さうして、前者は日本共産党といふ組織に頼つて(今風にいふ)自己実現を藝術家として図らうといふのに対して、安部公房は全く正反対に、藝術家の真理探究の中での孤独な死が、人類の人間としてある典型となるのだといふ主張を繰り返してゐます。

満洲で敗戦の後の国家秩序の崩壊した経験を語つた後に、安部公房は次のやうに続けます。

「その時感じたんですが、ダヴィンチなんか暴徒に襲われ家の門を破られそうになったとき、「神よみ心のままに」といって仕事を続けたとか、またアルキメデスが幾何を解いていたとき後ろから殺され用とした時の話とか、それがどんなに充実した生の瞬間であつたか.....これは個人的な立場にとどまらず、もっと人類的なもの、同時に人類的なものへ引き上げられてきていると思う。物を人類的に考えるということ、個人的に考えるということは、どちらか一方だけであつてはいけないので、一種の緊張の中に自分を納得させるものが生まれてくるんじゃないかと思つたんですがね。」(全集第2巻、66ページ)

また更に、『安部公房と共産主義』(もぐら通信第29号)より以下に引用します。

ドナルド・キーンさんとの対談『反劇的人間』の中で、安部公房は自分はナチス・ドイツの映画を見るのが好きで、繰り返し見るのだといひ、それが何故かといふ文脈の中で、次のやうに語つてゐます。

「存在になるとは、戦敗したナチスの若い兵士のように「まるで、楽屋に戻った俳優が、仮粧といっしょに、扮していた役柄まで洗い落としてしまった後のような、生々しい素顔」になること(『ミリタリィ・ルック』:全集第22巻、130ページ下段)、即ち、役者以前の誰でもない者、もともとの、リルケに習った無名の者に戻ることです。[註24]の後半で、安部公房が、言葉との関係で、演技者に存在になることを求めた考えを、その演技論をお読み下さい。

また、このナチスの兵士の話と同じ文脈の中で、安部公房は、「人間を信じるのは、疑うのと同じくらいいけないことだ」とつくづく思いました。」と語っています(『反劇的人間』全集第24巻、327ページ上段)。このとき、1973年、安部公房49歳。ここに、ナチスの若い兵士について語ることの中に、日本共産黨員時代の、若かった自分自身に対する苦い反省があります。

安部公房にとって、ナチスの純粋制服が何を意味していたかは、『もぐら感覚22:ミリタリィ・ルック』をお読み下さい(もぐら通信第27号及び第28号)。

安部公房の中では、10代にリルケに学んだ未分化の実存という人間のあり方と、ナチスの若い兵士の純粋制服の姿と、ナチス軍に引き立てられるユダヤ人の姿と、死を直前にしたときのダヴィンチやアルキメデスの姿[註18]と、安部公房スタジオの俳優たちに教えたニュートラルという概念と、これらはみなひと連なりになっているのです。」

また再度、『安部公房と共産主義』(もぐら通信第29号)より以下に引用します。

「ナンシー・S・ハーディンとのインタビュー、『安部公房との対話』(全集第24巻、478ページ下段)で、安部公房は次のように、『第四間氷期』と革命について述べて言います。これは、結局、安部公房を発見した埴谷雄高の至った「存在の革命」と同じことを、安部公房は言っているのです。それを「内部の対話を誘発すること」と言っております。これは、その人間の意識の革命のことを、ふたりとも言っているのです。

「一まだ話題にしていない小説のひとつに『第四間氷期』があります。あとがきのなかで、この小説の目的のひとつは「読者に、未来の残酷さとの対決をせまり、苦悩と緊張をよびさまし、内部の対話を誘発すること」(『第四間氷期』二七二頁)だと書かれています。

安部 ひとことだけ説明します。ぼくは革命というものに決して反対ではありません。しかし、強調しておきたいのは、革命ではそれを望む人々が逆に殺され傷つけられたりすることが少なくないということです。革命家が自覚して己の幸福のためよりもむしろ革命のために進んで苦しんでいるならば、自分の命を賭ける自信や、革命で殺されてもよいと信じる意志がないならば、革命など起こせません。反対に、もしそれほどの強い意志が

あるならば、当然起こすべきです。それが『第四間氷期』のテーマです。」(傍線筆者)

安部公房を発見した埴谷雄高が、存在を絶対的なものとみたことに対して、安部公房は、存在を相対的なもの(関係概念)とみたことが、この二人の一番大きな違いです。この、存在が相対的なものであり、即ち関係であること(関係概念)を、安部公房は同じこのインタビューの中で、10代で考えた自分の実存主義の理解として、次のように述べています。傍線筆者。

「ぼくが実存主義に傾倒した一番大きな理由はごく単純で、「存在が本質に先立つ」とぼく自身考えたからです。軍国主義においては本質が存在に先立っていました。祖国とか母国という概念が本質というカテゴリーに入るわけです。ところが実存主義的観点からすれば、そうした概念は一種の従属概念に過ぎません。」(全集第24巻、476ページ下段)この発言による10代の安部公房の考えは、そのまま最晩年のクレオール論の考えです。

また、この註の、上の安部公房の革命についての最初の引用、「革命家が自覚して己の幸福のためよりもむしろ革命のために進んで苦しんでいるならば、自分の命を賭ける自身や、革命で殺されてもよいと信じる意志がないならば、革命など起こせません。」という言葉は、1970年代になって立ちあげた安部公房スタジオで、安部公房が俳優たちに教えたニュートラルという演技概念と全く同じものです。即ち、安部公房は、戦勝しているときのナチスドイツの兵士に引き立てられるユダヤ人の姿を例にとり、これがニュートラルだと教えています。

即ち、死を前にして、それを受け容れる、(わたしの言葉でいえば)無言で誰にも言わずにその覚悟をした人間の姿のことです(全集第24巻、147~148ページ)。このニュートラルという概念を、安部公房は言い換えて、安部スタジオの俳優たちに「ニュートラル」になることを、即ち役割を「演ずる前に、まず存在していなければならない」ことを求めたのです(『人間・反人間』:全集第24巻、465ページ)。また[註24]でも、同じことを三島由紀夫との共有する演技論・演劇論として述べている安部公房がおりますので、お読み下さい。

この「無言で誰にも言わずにその覚悟をした人間の姿」とは、それから、また、この、役割を「演ずる前に、まず存在していなければならない」とは、すでに10代の安部公房の愛と別れと死の、そうしてニーチェに習った独自の思想「概念から生への没落」による、世間に「未登録の人間」の姿、あの『旅よ』という詩で歌った「木の間 木の間」に滴る緑色の雫であり、この未分化の実存としてその隙間の接続空間(論理積、conjunction)に孤独に「蹲る影」(『主観と客観』、全集第1巻、165ページ)としての人間の姿、即ち雫としてかくも小さいが、しかし存在として在る絶えず旅して、移動して

止まないfunction、即ち一次元上の空間を旅する機能としての人間であることは、『もぐら感覚21:緑色』（もぐら通信第25号と第26号）で詳しく論じた通りです。

安部公房スタジオの創設とは、安部公房を発見した埴谷雄高流の言い方をすれば、「存在の革命」を起こすことであつたのです。即ち、その人間の意識の革命のことです。この場合の人間とは、劇場の中にいる、舞台の上で演技する俳優と、その演技を観る観客でありましょう。この世界を劇場と見る考え方は、既に20歳の理論篇『詩と詩人(意識と無意識)』に明らかに述べられています(全集第1巻、104ページ下段から105ページ上段)。この劇場観、即ち、バロック的な世界観については、[註7]と[註21]を参照下さい。

他方、この同じ理由が、小説の領域では『箱男』を書き、何故安部公房が読者も参加する構造の小説を考えたかという理由なのです。小説の読者にも意識の根本的な変革を願ひ、『箱男』を執筆したのです。(略)

「いったいシャーマンは何を歌いつづけているのでしょうか。聞き違いでなければ、ぼくにはどうも、存在のように聞こえます。結構いい傾向です。《ことば》自体は本来、分化や分業化を得意としていたはずですから、いったん「言語のシャーマンになれ」の号令をかけても、これがまた強力な信号として働かないのです。」

と、私ならば言ひ換へる所です。

つまり、読者一人一人が言語とは何かといふ問いに自ら答へる事がなければ、読者は安部公房と同列に並ぶシャーマンになる事ができないといふ此の難しさの、安部公房によつて隠された、即ち生命そのものを文法に則つて自分自身の言葉で言語化するといふ変形の仕事を欠いては、読者は此の言語・存在論的な窪み(凹)に足を取られて躓き、安部公房の考への全体を知る事ができないといふことになるのです。そして、自分と社会との関係、自分と国家との関係を考へるための言葉(語彙)を持つ事の出来ない幼稚な人間になつてしまふ。それ故に、自分の言葉で社会や国家を論理的に批判する事が出来ない。これが、安部公房文学の、恐らくは最大の毒です。何しろ自分が奉られることは、安部公房の最も忌避すべきことでありませうから。

この安部公房最大の毒に対する免疫をあなたが獲得するためには、「もはやどんなシャーマンの御宣託にも左右されない、強靱な自己凝視のための科学的言語教育」を受けねばなりません。(全集第28巻、239ページ)これが、安部公房の処方した「国家信仰」を冷却させるための具体的な提案であり、解毒剤です。

勿論、これは何を意味するかといふと、シャーマン安部公房の言葉を鵜呑みにするのではなく、「もはやシャーマン安部公房のどんな御宣託にも左右されない、強靱な自己凝視のための科学的言語教育」を、あなたが自らに施さなければならぬといふ事なので

す。安部公房は、この「教育」のための独立した「府」を追加して、現行の民主主義の三権分立に加えて、四権分立とする提案をしてをります。あなた自身が、この「府」の長官に就任しては如何でせうか。あるいは「府長」といふのでせうか。このやうに考へて初めて、あなたは権力とは何か?国家とは何かといふ本質的な問いに答へることになり、安部公房が実際に行つた問題上昇、即ちデジタル変換を経験することになるのです。従ひ、安部公房の言ふ「もはやどんなシャーマンの御宣託にも左右されない、強靱な自己凝視のための科学的言語教育」とは、(言語機能論に依る)哲学、即ち安部公房の象徴学、即ち「新象徴主義哲学」にほかなりません。

どうか、あなたの人格を、安部公房といふ一時小荷物預かり所に預けてしまひませんように。

さて、これで一通り、安部公房文学の含んである毒を四つ挙げてお話ししました。お読みになつたやうに、どれも猛毒である上に、これらはいづれも相互に有機的に関係してをりますので、その圧倒的な総合力に読者は抗ふすべなく、いつの間にか、あれおかしいなと思つてゐるうちに、「いつの間にか」「既にして」「気づいたら」、即ち超越論的に、安部公房の直喩に富んだ文体に、みな殺(や)られてゐるといふ事になるのです。

読者としては、「もはやどんなシャーマンの御宣託にも左右されない、強靱な自己凝視のための科学的言語教育」を自らに施し、その毒に対する免疫力を養ふ以外にはありませんが、さう言つた途端に、そんな免疫力なんてできるわけがないぢやないか、言語の本質を知らなければ、即ち言語は機能であるといふことを知らなければ、といふ誰かの声が、世界の果てから聞こえてきさうな気がします。この、世界の果てにゐる誰かであるS・カルマ氏の声は、安部公房の読者であるあなた自身の声の再帰的な木霊(こだま)であり、再帰的な、従ひ常に反復され繰り返される呪文の解毒剤なのです。

この、世界の果てから聞こえて来る呪文についての安部公房の言葉です。これらの言葉は全て、言語は再帰的(recursive)であるといふ事実に拠つてゐます。即ち、言語は繰り返し自分自身に帰つて来るのです。

「—— 散文が儀式化なしに対抗できる理由はなんでしょう。安部 儀式化そのものが強力な言語機能なんだよ。言語に対する有効な解毒剤はやはり言語以外にはありえない。そういう言語を散文精神と命名したまでのことさ。でもこの規定は、今後批評の基準として利用できそうだね。けっきょくテレビ攻撃より、散文精神の確立のほうが、僕らにとっては急務だろう。」(『破滅と再生2』全集第28巻、266ページ)

「まったく奇妙な動物さ、人間つてやつは、遺伝子から這い出して、とうとう遺伝子が遺伝子自身を認識してしまつたんだよ。「言語」によって遺伝子が遺伝子自身を認識して

しまったんだよ。だから「言語」とは何かを考えるにしても、言語で考えるしかない。言語の限界という表現でさえ言語表現の枠を出られない。井戸の中を見おろすように、言語で言語の中を覗き込んでいるのが人間なんだな。

——つまり認識の限界、すなわち言語の限界だということですね。

安部 限界というより、構造と考えるべきだろうな。(略) (『破滅と再生2』全集第28巻、254ページ)

「安部 (略)いまぼくに興味があるのは、むしろ超能力にあこがれる気持の裏にある心理の謎なんだ。一種の「認識限界論」だね。人間の認識にはしよせん限界があり、当然それを超えたものがあるはずだという……

——つまり認識の限界の可能性を超能力に託しているわけですね。

安部 そうなんだ。でも認識に限界があるという認識は何によって認識されるかというと、言語以外にはありえない。だいたい認識は言語の構造そのものなんだよ。」 (『破滅と再生2』全集第28巻、253ページ)

「スプーン曲げを信じないことと、作品の中で登場人物に空中遊泳させることは、僕のなかでなんら矛盾するものではないんだ。小説の場合、言語の構造として確かな手触りが成り立てば、それは現実と等価なんじゃないか。言葉でしか創れない世界……なぜ飛んだか、なぜ飛べたかの説明を、小説以外の外の世界から借りてくる必要なんかぜんぜんないと思う。」 (『破滅と再生2』全集第28巻、258-259ページ)

「大事なものは多分、技術が内包している自己投影と自己発見の問題でしょう。あるときぼくはカメラのちょっとした故障を修繕しながら、うまくいきそうになった時、無意識のうちに「人間は猿ではない、人間は猿ではない」と呪文のように繰り返しているのに気がきました。(略)ぼくの呪文は、単に作業をプログラム化できたことの喜びを表現しようとしただけのことです。ところがこの「作業のプログラム化」とは、いったい何でしょう?試行錯誤もあるでしょうし、イメージのなかでの座標転換作業もあるでしょう。しかしけっきょくは時間軸に刺った手順の見通しです。自分の行動と対象の変化を、因果関係として総体的に掌握することです。《ことば》の力を借りなければ出来ることではありません。もともと自己投影とは《ことば》の構造そのものなのですから。」 (『シャーマンは祖国を歌う—儀式・言語・国家、そしてDNA』全集第28巻、231ページ)

以上の晩年の論理と同じ論理を実作として既に表してゐる19歳の小説の処女作『(霊媒の話より)題未定』の冒頭最初の段落をご覧ください。

「そう、もう十年以上も昔になるかね。今と異(ちが)って失業者とか乞食とか云う結構な連中がぞろぞろして居た頃さ。其頃と言えは全く、今の様にこう戦争が始まって皆の心持ちが引きしまつて居る状態から見れば、全くの所お話にならぬ程馬鹿馬鹿しい事も

多かったね。今から 話そうって言う事もまあ其の一つかも知れないね。だがまあそれにしてもなかなか面白い事なんだ。」(傍線筆者)

そして、『(霊媒の話より)カンガルー・ノート』の最後の呪文。存在の箱の中へと人さらひを招来するための、さうやつて箱の中から窓を通つて主人公がさらはれて脱出するための、この小説最後の呪文。存在を表す「()」の中で唱(とな)へた、存在としての、存在の中での、最後の呪文。

「(オタスケ オタスケ オタスケヨ オネガイダカラ タスケテヨ)」(全集第29巻、188ページ下段)

(終りの始まり/始まりの終り)

そして、安部公房が奉天で書いた、今残つてゐる、恐らくは一桁の学齢の時の、最初の詩、『(霊媒の話より)クリヌクイ』。存在の部屋の中へと人さらひを招来するための最初の呪文。

「クリヌクイ クリヌクイ
カーテンにうつる月の影」

(始まりの終り/終りの始まり)

シャーマン安部公房は、呪文の繰り返しの間(ま)と、文字の間(はざま)の一文字分の空白に今も生きてゐる。即ち存在、即ちこの世に生きるあなたから見ると、あなたを強烈に惹きつける、無名の間人である何か、即ち言語として、全ての作品の中に。

この一文が、あなたが自分自身であなた自身のために再帰的に調合する解毒剤の参考となり、更に一層、孤独と「強靱な自己凝視」の迷路迷宮を果てし無く彷徨(さまよ)ふことになることを祈つてをります。

絶望の日々をお送り下さい。

『燃えつきた地図』の団地風景（1964年）

岩田英哉

これは「団地への招待（1964年）」と題した動画です。

間違いなく、これは安部公房が1967年に発表した『燃えつきた地図』に描かれてある団地の様子です。

<https://www.youtube.com/watch?v=eyA4UeFqN-Q>

映像を見ると、主人公が依頼人の「レモン色のカーテンの女」を訪ねる時に、呼び鈴を押すと、鉄の扉（ドア）にある小窓から訪問者確かめる場面の小窓とはこのやうなものかといふことなど、その他室内の間取りや家具調度その他の様子がわかります。『燃えつきた地図』の読者には興味深い映像だと思ひます。惜しむらくは、小説の最初と最後に登場する水銀燈が、最後に映つてゐますが、小説は多分一本の水銀燈であると思はれるものが、この映像では複数本並んで立つてゐます。

日本の国内での団地の普及といふことは、SF文学との関係でも『筒井康隆自作を語る』（17ページ下段）に次のインタビューのあることを読めば判ります。当時のSFと団地新聞の関係です。

「——六三年からは〈団地ジャーナル〉という新聞でもショートショートの連載がはじまります。

筒井 これは小松さんが紹介してくれた仕事ですね。眉村さんと小松さんとぼくが交替で書いた。

——必ず団地を題材にする、というキツイ縛りの連載でしたね。

筒井 三人ともあとでそれぞれのショートショート集に入れたんだけど、傑作がけっこうあるんだ。「給水塔の幽霊」なんてのは気に入ってます。ショートショートが得意というわけではないけれど、無理して書いたわりにあとで読み返してみると、自分でもびっくりするやうないいものがある。」

さて、此の映像のナレーションを聞いて私たちがびっくりする事は、団地を尋ねる若い女性の日本語の上品なことです。このやうな上品な言葉が私たちの日常に生きてゐた。このあと高度経済成長が始まつて今の世に至るまでの間に、巷間耳にする若い女性たちの言葉は、十代の女の子の言葉も含めて、酷いものになりました。

日本の女性には、もつと日本の男に恋をし、日本の男をもつと愛して、新しい日本の女性の、さう、二十一世紀のやまとなでしこの新しい女性の美しい日本語を産み出してもらひたい。私の好きな雄略天皇のおほらかな御製、恋（エロス）の奥行きと深さが一体どれほどのものであることかを。命名と恋（エロス）の関係と云へば、安部公房の読者には伝はるでせう。この場合は無名なのはS・カルマ氏ではなく、Y子が無名の「菜摘ます子」なわけですが、命名とエロス（恋）と権力の関係を歌つた雄略天皇の御製です。

籠（こ）もよ み籠（こ）持ち 堀串（ふくし）もよ み堀串（ぶくし）持ち この岡
に 菜摘ます子 家聞かな 名告（の）らさね そらみつ 大和の国は おしなべて
我（われ）こそ居（を）れ しきなべて 我（われ）こそ座（ま）せ 我（われ）こそ
ば 告（の）らめ 家をも名をも （万1-1）

[<http://www.asahi-net.or.jp/~sg2h-ymst/yamatouta/sennin/yuryaku.html>]

かうして雄略天皇の御製と比較してみると、芥川賞受賞作『S・カルマ氏の犯罪』は陰面としての家父長小説且つ藝術家小説であることが判ります〔註1〕。即ち、私小説の内部と外部を等価交換した、私小説の裏返しの小説です。即ち、安部公房の二項対立の否定による第三項を求める新象徴主義哲学の論理によれば〔註2〕、

『S・カルマ氏の犯罪』は、〔（家父長小説であり且つ藝術家小説であり）且つ（家父長小説ではなく且つ藝術家小説ではない）〕第三の小説である

といふことになります。

この論理の二項対立否定の第三の隙間（存在）にS・カルマ氏も箱男も、読者たるあなたも、生きてゐる。

〔註1〕

筆者による私小説の定義

私小説とは、明治時代に欧米の文明の到来に直面して生まれた、家父長小説であり且つ藝術家小説である小説である。

〔註2〕

安部公房の名付けた新象徴主義哲学といふ此の哲学とは『詩と詩人（意識と無意識）』に拠つて簡潔に言へば、二項対立の両極端の項を否定して、自己喪失による記憶の喪失を代償に（この否定の中に自分自身の否定を、この否定とは自己喪失と記憶喪失と意識喪失のことにほかなりませんが、このやうな否定を含むといふことです）、果てしない垂直方向（時間の存在しない方向）に次元展開を繰り返した果ての究極に観る（自己の反照としての）第三の客観、即ち存在の創造をするといふ方法論でありました。ここで

- (1) 観ること
- (2) 自分自身が存在になること
- (3) 存在自体の出現

これら三つが一つになつてみます [註A]。ここにも3といふ数字があります。

安部公房の、これが創作の秘密であり、一生を貫く創作のための方法論です。これは、コンピュータの基礎であるブール代数による二進数の論理演算の論理によれば、否定論理積といふ論理に当たります。これが、一生の安部公房の生きる論理であり、安部公房の「現代の実存哲学とは一寸異つた実存哲学」であるのです。

[註A]

- (1) 観ること

これもリルケに学んだ事です。以下中埜肇宛書簡より引用します：

「中埜君、御變りありませんか。昨日やつと旅行から歸つて参りました。永い旅でした。丁度リルケがロダンから學んだ如く、僕もリルケから「先ず見る事」を学びました。」（『中埜肇宛書簡第5信』全集第1巻、92ページ）

安部公房の詩に『観る男』といふ詩がある。（全集第1巻、133ページ）ここには、既に「明日の新聞」が「書き了へた」「未来の日記」とし出てくる。

また、汎神論的存在論の形象（イメージ）が、後年の海や洪水などに通ずるものとして、次のやうに歌はれてゐる。

「此の果てしない存在にとりかこまれて、あふれ出た透明な涙を両手に受けるのは……？唯一未来の日記を書き了へた時に……。」

此の詩には、これ以外にも、転身、沈黙、「僕の中の「僕」」の話法、出発、忘却といふ、安部公房文学にとって本質的な用語が書かれてゐる。

- (2) 自分自身が存在になること

「詩人、若しくは作家として生きる事は、やはり僕には宿命的なものです。ペンを捨てて生きるという事は、恐らく僕を無意味な狂人に了らせはしまいかと思ひます。勿論、僕自身としては、どんな生き方をしても、完全な存在自体——愚かな表現ですけれど——であればよいのですが、唯その為に、僕としては、仕事として制作と言ふ事が必要なのです。これが僕の仕事であり、労働です。」

（『中埜肇宛書簡第8信』（1946年12月23日付）、全集第1巻 188ページ下段）」

- (3) 存在自体の出現

『詩と詩人（意識と無意識）』より引用します。ここでいふ第三の客観こそが、安部公房のすべての主人公の最後に観る究極の存在のことなのです：

「諸々の声は吾等の魂が夜の本質にふれた所から始まる。それが様々な次元に展開されて言葉となる。それは自己否定＝自己超越の形を以て意識の中に捉えられる。物それ自体、云い代えれば夜の直覚が展開

する自体として或種の象徴的予感を産みつける。その中にこそ実存的意義を失わない、客観なる言葉を生み出した本源的な内面的統一に反しない、第三の客観が視視されるのではないだろうか。

如何なる表現も主観を通してのみなされ得ると云う事は明かである。主観的体験のみがあらゆる意識を言葉たらしめるのである。そして当然、生存者としての人間各個の内面的展開次元の相異に従って、その言葉の重さ（含まれている次元数）の相異が考えられる。主観はその魂の夜の本質にふれる程度によって様々な重さを持つ。

では此の主観のつもり行く次元展開の究極は、一体何を意味するのであろうか。その時人間の魂は限らない夜への切迫を体験するのである。夜の直覚は単なる概念ではなくなり、行為・体験・方法の中に現実的な姿を表すのである。そして、此の永遠の距離を以てはるかへだたっている究極を、吾等は第三の客観として定義する事は出来ぬものであろうか。」

（全集第1巻、107ページ）」

Mole Hole Letter

サンチヨ・パンサを求めて

～君の中の《君》へ～

(2)

Brexitの深い衝撃

岩田英哉

西暦2019年(令和元年)5月25日深更の今、ドイツのtageschau(ターゲスシャウ)といふ毎日放送されるネット上の報道番組でイギリスのメイ首相辞任のニュースを見て、ドイツ国内の反応を見たところです。

この首相の辞任に対して、ヨーロッパの統一といふことをドイツ人たちは、この報道でみる限り頻りに主張してゐる。これは、日米欧ともに変はらぬ20世紀一斉同報型マスメディア共通の主張でもあるのでせう。映像の一例を挙げれば、ロック・コンサートみたいな舞台の背後にWir machen EU、英語でいふならば We make or are making EU またはwe will absolutely/definitely make EUといふスローガンが掲げられてゐる集会の様相も映されてゐました。その大きな文字で書かれたスローガンの前でマイクを持つたTシャツの若い男が何か、懐かしい言葉を使へば大衆に、何か演説をしてゐる。

何故こんなにEUに固執するのだらうかといふ問いを立てると、答へは、実はヨーロッパ近代300年間この地域の白人種キリスト教との求めて来たものは、結局それから逃れようとして来たキリスト教の代替物であつたのではないか?といふ皮肉な答へです。もつと正確に云へば、バチカンを総本山とするキリスト教会組織の代替物です。あるひは、擬似的教会組織といふと分かりやすいかも知れない。如何に人間を支配するか。

何故、そんなことを思つたか?それは、出てくる映像の回答者の口にするEUといふ呼称が恰も宗教のやうに響いてゐるからです。EUは何かの宗教である。何の根拠もなく、当然のことのやうに、説明不要といふ前提で、Brexit反対を唱へ、そして何故なら、従ひ、EUを維持すべきだといふ論理になつてゐるからです。勿論、マスメディアですから、日米欧共通にもはや其の報道を其のまま鵜呑みにする事は出来ず、意図的に其のやうな発言だけを集めて編集してゐるといふ疑問を否定する事は出来ませんが、しかし、マスメディアがさうだといふ事は、さうだとすれば、マスメディアは其れを願つてゐるといふ解釈をする事は出来ます。そして、これが仮にドイツ国民の大きな声、大多数の声であると、仮に(仮にです)、仮定して考へてみませう。

EUは何かの宗教である。何の根拠もなく、当然のことのやうに、説明不要といふ前提で、Brexit反対を唱へ、そして何故なら、従ひ、EUを維持すべきだといふ論理になつてゐる

といふ事は、このイギリスのEU脱退は相当にEUに衝撃と損害を与えてゐることになつてゐるといふ事です。眼目は、恰も宗教のやうに、といふ所にあります。

私の観察では、今のEUをつくつた動機は、最初はともあれ、このヨーロッパの地域から日本を排除するためでした。あるひは穏当に言って、日本に対抗するためでした。そのためにEUといふ経済圏の城塞をつくつた。（同じことを何かのネット番組で日下公人さんといふ方がおつしやつてゐたので、僕の観察は正しいと思ふ。）当時私が実社会にみて目にした動機はそのやうな動機です。その象徴が、ISO9000といふ組織品質の国際規格の国内企業間での大流行です。何故なら、この国際規格の認証がなければ、ヨーロッパに商品を輸出できないとしたからです。

これは、商品の産業的な規格ではなく、人間の組織の品質の規格であり、ヨーロッパ人の組織の作りかたをしなければ、物品がヨーロッパに輸出できないといふ、今かうして君に書いてゐても、馬鹿馬鹿しい規格である。何故なら、組織品質とは文化の問題だからである。それに規制を掛けた。日本人はこの資格の取得に狂奔したのである。当時日本は1990年代後半で、僕はその渦中にゐたからよく知つてゐる。

この国際規格、と言つても実はヨーロッパ規格と正しくはいふべきですが此の種の過ちを明治以来日本人は何度犯しても懲りない民族であるが、しかし、このヨーロッパ規格に学んでよかつた事は、彼奴等の近代の株式会社の組織とはこのやうにできてゐるのか、とか、かうやつて同じ組織を作らせて植民地経営をした来たのかといふことを知ることができた事です。何しろ、これはスイスのジュネーヴに本部があり、EU規格として公布されたとは云へ、中身はBS規格、即ちBritish Standardそのものをただ看板を付け替へただけのall BSであつたから、なるほど大英帝国はこれをやつたのかといふ事を知つた事は誠に良い経験であり意義深い経験で（日本人としては）あつた。それと、なるほど、大英帝国は依然として20世紀の後半になつても、かうやつて国際規格を通じてスイスを基点にしてヨーロッパを支配し、世界を、特に日本人を支配してゐるのかといふ事でした。当時の率直な僕の感想を思ひ出して述べれば、やはりイギリスといふ国は大した国だといふ思ひがしましたし、今もしてゐます。

問ひ：そのイギリスがEUを脱退してBrexitするといふ事は何を意味するか？

答へ：EUの城塞（壁）のstraight（ストレート）な、即ち短期間での強烈な崩壊、即ち大きな混乱

EUが今のEUになつたマーストリヒト条約1993年発効当時の結成主旨からみて、今やEUの敵はもはや日本ではないだらうから、当然に新たな有色人種の敵をヨーロッパの白人種キリスト教徒は求めて、敵は中国共産党だといふ事になる。有色人種の人種差別が激しくなるだらうし、私はこれはヨーロッパの白人種のためには良い事だと思ふ。この場合、人種差別は肯定さるべきである。しかし、他方、この間グローバリズムといふ

共産主義によつて生まれた偽善がはびこつてゐるので、これはこれで大変だといふ事になるし、何よりも移民・難民の問題を抱へてゐる、といふのは、これは、彼奴等の植民地政策の復讐を自ら受けてゐるとしか思へないからである。何故なら、一国の中に他の民族をわざわざ移住させて、国内分裂一民族分裂を画策して利害の対立を生んでこれを経営と称して漁夫の利を得るやり口が、即ち敵にも味方にも武器を売るといふのが、彼奴等の植民地経営だからである。日本といふ民主主義国家に公安委員会の監視対象である共産党が合法的にあるといふ異常な事態を何処の国が意図的に惹き起こしたかを、たつた70有余年前の歴史的事実だ、これを思ひ出して日本人は歴史認識とやらを改めたら良いだらう。今の日本は益々グローバリズムによる其の危機にあるといふことだ。敵は依然として共産主義であり（アメリカといふ国が国の成り立ちから言つて共産主義国家であるといふ事は『安部公房のアメリカ論～贋物の国アメリカ～』（もぐら通信第22号）に論じた通り、アメリカもこれに含まれる）、フランス革命であり、民主主義であり、即ち敵はこれらのイデオロギー（教義）である。

何故彼らはかくもいつも（ここは韻を踏んでゐる、みやびは大切です）かくあるのか、と問へば、最初の仮説に戻るが、キリスト教教会の組織を雛形（今風に云へばテンプレート）にしてゐるからではないのだらうか。即ち、終末思想の主張による個人の恐怖心の惹起による個人心理の感情的絶対支配と、その救済たる方舟思想の唱導である。これは『安部公房と共産主義』（もぐら通信第29号）で論じたので詳細は繰り返さない。

旧約聖書のノアの方舟に乗船資格のある者は少数者即ちユダヤ人だけだつたが（ノアはユダヤ民族の象徴的な代表であらう）、近代20世紀の方舟は大衆（十把一絡げのマス、量としての人間、これを労働者と呼んだ）のための方舟であり、その造船設計者は共産党であり設計思想は共産主義といふイデオロギーである事を唱導したのがマルクス主義であつて、この狂気が20世紀には猖獗を極めた。しかしマルクスもユダヤ人であり、ロシア革命の主導もユダヤ人であつたといふ事実は銘記すべきだ。それと同じ事が、21世紀にまた復活するだらうといふ事になります。即ち、

彼らにとつてのイデオロギーとは何かと云へば、それは終末思想と方舟思想なのだ。この二つがイデオロギーといふものの正体である。とすれば、僕の最初の仮説、即ち此処300年のヨーロッパの組織構築に関する雛形は、キリスト教教会の教義と（その教義に基づく）組織編成の模倣の繰り返しだといふ仮説は正しいのではないか？キリスト教の教義は終末思想と方舟思想からなつてゐる筈だ。今流行りのAIも、僕には終末思想の流行に見えるよ。ベルリンの壁が崩壊し（1989年）、ソヴィエト連邦が崩壊して（1991年）、フランシス・フクヤマが公刊した（1992年）『歴史の終わり』（原題：The End of History and the Last Man：『歴史の終わりと最後の人間』）といふ発想もまた終末思想だ。「最後の人間」とはノアのことだらう？そんなに自分だけは唯一絶対神に愛されたいのか？他者の皆殺しを肯定するほどに。これは独裁者の思想であ

る、もしこれをしも思想と呼ぶことができるならば。この事に気づかなかつたから、ベルリンの壁が崩壊して、その向ふの東側にあつた共産主義が洪水になつて地球を覆つてノアの洪水といふ共産主義の洪水になつたのが今の世界だと僕は思ふのだ。

歴史が一次元の直線的時間ならば、終焉する筈が論理には全くないのです。何故なら時間とは差異であるからです。時間は、時間的差異、即ち遅延として、いつまでも存在し続けるからです。即ち、幾らヨーロッパ白人種キリスト教徒が渴望しても、終末は永遠にやつて来ない。

この、日本人にとっては高天原以来1万5000年は当たり前の超越論の世界認識を、彼奴等の哲学の世界でいつたのが、ドゥルーズやデリダといふフランス人だといふことが面白いね。前者は襲といひ、後者はdeconstructionといつた。Deconstructionといふ言葉は其の概念を見ると、脱構築ではなく、解体構築と訳す方が分かりやすいよ。この訳語を目的と手段の関係で整理すると次の解釈が成り立つ。

最初の前提は、

解体する事は構築する事である……【a】 OR 【a'】（これは安部公房の本物・贋物論の論理である）
構築する事は解体する事である……【a'】 OR 【a】（これは安部公房の本物・贋物論の論理である）

といふ等式としての超越論的な即ち汎神論的存在論の等価原理による等式です。

今書きながら思ふが、この二項対立の調和的解決は17世紀の哲学者にして数学者ライプニッツの論理でもあるね。この歳になつて何故ライプニッツが微分積分といふ相反するものの統一的な数学の体系を考へたか、また二進数を考へた最初の人間の一人かがよくわかるよ。歳はとるものだね。これはボヤキではないよ。俺はボヤクために生きてゐるのではない。さて、即ち、

価値は等価で遍在する。

といふ等価原理、そして、そのあとで、この超越論的解釈の上で、次の目的と手段の関係による二つの解釈が成り立つ。これは、安部公房の読者にはお馴染みの、時間の中での二項対立の選択肢だよ。

- (1) 解体するために構築する。……【b】
- (2) 構築するために解体する。……【c】

と、このやうに考へて来ると、【b】と【c】は【a】 AND 【a'】に「既にして」含まれてゐるので、デリダの論理は【a】 AND 【a'】にあると理解して問題はないと思ふし、彼のセッションと称するアメリカのエール大学での連続的な講義録は、どれも此の通りの論理展開になつてゐる。ドゥルーズの襲も同じ概念です。何故なら凸は凹だし、凹は凸だからね。安部公房の世界だよ。

やれやれだね、世界中の人間がみんなS・カルマ氏になつたらいいのだ。さうしたら、世界は少しは自分が倒錯してゐたのだといふ自覚が生まれて、なるほど俺は私は精神病患者だつたのかといふことを知つて、少しは世の中が明るくなるかも知れない。

さて、この、日本人にとっては高天原以来1万5000年は当たり前の超越論の世界認識を、彼奴等の哲学の世界でいつたのが、ドゥルーズやデリダといふフランス人だといふことが面白いね。

と書いた事は、何故フランス人がJapan（日本）をジャポニズムとして受容したのかといふ歴史的事実に多分、大いに関係があるのではないかと思ふ。今もCool Japanは彼の国でも流行してゐるやうであるからして、僕の推理は正しいと思ふよ〔註1〕。

〔註1〕

Cool Japanが何を意味するかは『安部公房とチョムスキー』（もぐら通信第81号）の「7. 大地母神崇拜をtopologyで読み解く」をお読み下さい。古事記との関係で詳述しました。

といふのは最近フランスのバロック小説の歴史を読むと〔註2〕、これがドイツのバロック小説と趣が全くどうも異なるのです。隣国同士なのに文化が全然、同じ17世紀のバロック小説と呼ばれる名前のもとで範疇が同じなのに、その内容が異なるのです。

〔註2〕

『フランス・バロック小説の世界』（倉田信子著。平凡社）

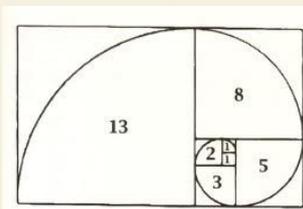
フランスの17世紀のバロック小説には騎士道が生きてゐて、宮廷文化も生きてゐて、ドイツやスペインとは違ふ。即ち『阿呆物語』や『ドン・キホーテ』の主人公たちのやうな、無名の人間として登場して来て、無名の人間にあへて名前をつけてジンプリとかドン・キホーテとかいふ人物が生まれるといふ順序の謂はば庶民の世界ではない。君は安部公房の読者だから『S・カルマ氏の犯罪』の主人公S・カルマ氏を思ひ出せば良いのだ。これがバロックです。しかし、フランスの17世紀のバロック小説の主人公には、最初から登場人物に名前があつて、その修業の使命も貴婦人のために自己犠牲を自らに強ひて高貴である。つまり、中世のキリスト教の騎士道が17世紀のフランスには生きてゐる。ところが隣国のドイツは30年戦争の舞台になつて（1618年～1648年）国土がヨーロッパ中の軍隊と戦争に蹂躪されて荒廃して悲惨な目にあつてゐる。といふ対比は、実は21世紀の今に至るまで効いてゐるのではないか？つまり、これが歴史なのだと思ふのだ。（日本についても同じ思考形式が、日本の近代の問題解決にも適用できます。）つまり、フランスとドイツが仲良くすることなどあり得ないといふ歴史的事実に戻りつつあるのが今のEUだといふことが、文学の立場から、いひたいのである。

そして、話はBrexitに戻りますが、この17世紀で面白い位置にゐるのがイギリスなのです。ドイツの本屋から引いて今僕の手元にあるが、分厚い1000ページを超える『30年戦争史』をイギリス人が書いてみて、ドイツ人がそれをドイツ語に翻訳して自国の当時の歴史を知るために読んでゐる。これは実に詳細な30年戦争史です。何がほしいかといふと、日本もイギリスの、ユーラシア大陸を挟んで対極の東にゐるわけだから、同様に日本人が大陸の歴史を書くことができるだらうといふことです。これを怠って来たことの政治的なツケを「戦後」70有余年の今私たちは支払ってゐるのではないか？大陸に海を隔てて（ドーバー海峡よりも幅が広い海域帯を有して）ゐるといふ、対象に距離があるといふ地の利を活かして、大陸史を書くことができるといふ自覚を日本人は常識とすべきです。（宮脇淳子氏や岡田英弘氏のご著書は、この意味で、実に有意義であり、歴史的価値ある著作です。大川周明といふ天才が近代の此の嚆矢ならば、イギリス人と同じく此の種の歴史家の系譜が日本にはあるといふことを日本人は思ひ出すべきだと僕は思ふ。）

この意義においても、今がバロックの時代であり、1953年の発表になる遺伝子が二重螺旋構造だといふ人類の生命に関するバロック的な形象（イメージ）即ち二重の螺旋構造の発見、即ち世界は差異であるといふ認識論の再発見以来、ことは人間の遺伝子であるので、地球はバロック紀元であり縄文紀元だといふ僕の主張の根拠の主要な意味が、これで君に理解してもらへるのではないだらうか。二次元なら渦巻き、三次元なら螺旋、もつとヨーロッパの歴史を遡ると13世紀のイタリア人の数学者フィボナッチの発見したフィボナッチ数列もバロックですから[註3]、13世紀といふキリスト教の盛期の成熟した時代が17世紀のバロックに繋がつてみて、更に其処から近代300年の擬似キリスト教組織（近代国家を含み、唯一絶対神のtopologyによる組織）が生まれ続けてゐるとふヨーロッパの宗教的な歴史と伝統は誠に度し難いものがあるといふ事になります。一次元の直線的時間の歴史では13世紀と17世紀の間にルネサンスがあるといふ事になつてゐるが、しかし時間を捨象してtopological（位相幾何学的）に歴史を見るとかういふ事になります。これは僕の歴史観です。馬淵睦夫さんといふヨーロッパで大使を務めた方がやはりネットの番組で、今は30年戦争の後にヨーロッパ域内諸国で締結されたウェストファリア条約の17世紀に戻つた時代だといふ発言をなさつてゐるので、国際政治の専門家から見ても、僕の言語と文学の観点から見ても時代認識は同じである以上、この時代認識は正しいものだと僕は思ふよ。

[註3]

フィボナッチ数列についてのWiki：<https://ja.wikipedia.org/wiki/フィボナッチ数>



といふ事は、歴史の観方は一つではない。少なくとも一次元の時間に事件を並列する歴史観

（キリスト教の歴史観）と時間を捨象した歴史観（日本民族の高天原以来の本来の歴史観である topology の歴史観）と二つはあるといふ事になる。前者は時間の始めと終わりがあるといふ歴史観、後者は時間に始めも終わりもないといふ超越論による歴史観の二つです。更にイデオロギーによる終末・方舟思想による歴史観といふものをさう呼ぶことができるなら（私はとても歴史観と呼ぶに値しないと思ふが）、これで三つといふことです。この三つ目がマルクス主義史観といふものになる。マルクスの生みの親はユダヤ教であり、育ての親はヘーゲルです [註4]。産みの親より育ての親といふ日本の土着の慣用句は今や国際的にグローバル（全地球的）に通用する慣用句となつたといふ事だね。

[註4]

『安部公房とチョムスキー（11）』（もぐら通信第92号）をお読み下さい。ヘーゲルの『歴史の哲学』の急所を読んで、共産主義と全体主義ファシズムの、国家組織の編成と階層化についての大きな共通項を詳述しました。

本題に戻ります。

イギリスのBrexitの深い意味即ち意義は、イギリスは、ヨーロッパ全土が（ドイツを主戦場として）戦乱になつたあの17世紀のバロック時代を思ひ出したといふこと、イギリスは21世紀の「30年戦争史」を書こうとしてゐるといふことです。丁度マーストリヒト条約の発効1993年から26年である。もう大陸の敵対二国、即ちフランスとドイツについてのEU内観察は終はつたとイギリス国民は言つてゐるのです。ドーバー海峡をこの二国が渡って攻めてこないように、イギリスは二国の離間の策を図るといふのが歴史の教へるイギリスの対大陸政策ですが、そしてこれが大英帝国の植民地経営の骨法、即ち上述の一国一民族内複数民族移民導入による一民族利害対立惹起による同一民族内敵味方離間策となつたといふのが僕の仮説ですが、20世紀一斉同報型マスメディアの抹消的瑣末的断片報道現象といふ表層の下に伏流伏在してゐるのが、この歴史の潮流だと思ひます。此の意義に於いて、確かに歴史は繰り返してゐると思ふ。象徴的に、歴史の力を無視する事は出来ない。ドイツとフランスが相対立すれば、それはイギリスの国益である。ヨーロッパの統合などといふのは妄想である。ヨーロッパ人はローマ帝国の国家経営に学ばなかつたのだよ。キリスト教会の組織経営に学んでしまつたのだ。僕はEUができた時に其の版図を想像して、前者ならば中東のトルコは入るが、後者ならばトルコはEUには入らないと思つた。結果は、ヨーロッパ人は後者を選択したことを明らかに示してゐる。古代ギリシャローマの後継文明が近代ヨーロッパだといふのは中産階級（ブルジョワ）による歴史の捏造であつたといふことを、このEUの適用範囲の及ぶ事実が示してゐる。これが何故近代国家といふものを構成する民主主義と資本主義が、自由主義国家であれ共産主義国家であれ常にイデオロギーであるかの歴史的な理由であり、原因であると僕は思つてゐるのだ。これは第二次世界大戦のナチスドイツのユダヤ人虐殺にまで及んでゐる。この蛮行はナチスドイツだけの所業ではなく、これは歴史的には遅くとも13世紀のイギリスに始まるユダヤ人迫害をして来たヨーロッパの主要な各国の自国の問題であることを自覚しない限り、ドイツを含めたヨーロッパの復活はない。

EU諸国各国個別の歴史も文化にも無知で、現場を知らないブリュッセルの官僚が共産主義的にヨーロッパを支配するといふ現実、小なりとは云へ一国内の此の日本で現場を知らない霞が関の官僚が共産主義的に日本を支配するといふ現実、余りによく似てゐる。といふ事は、日本にあつても、20世紀一斉同報型マスメディアの抹消的瑣末的断片報道現象といふ表層の下

に伏流伏在してゐるのが、日本の歴史の潮流であり、此の意義に於いて、確かに日本の歴史は繰り返してゐると思ふ。象徴的に。かくして、

象徴的といふ言葉自体が、まさに「戦後」象徴的である。

といふ事は、「戦後」は、君ね、言語の観点から眺めれば、本格的に終焉を「既にして」迎へてゐるよ。超越論で考へてくれ。即ち、

イギリス人のBrexitのやうに、私たち日本人もJapanexit（脱亜）すれば（一度此の件は君とやり取りしたね）、といふか、既に意識下では始まり従ひ終はつてゐるので、それが進めば、日本人本来のtopologicalな二つめの歴史観と（高天原と大八島からなる）二階層の超越論による縄文紀元の国体が表立つて戻ってくるといふ事です。黙つてゐても。そして、象徴的に。さうすると人心は安定する。これが一番大事なことだ。言葉の本性はreversalだ〔註5〕、と以前書いた僕の言葉を思ひ出して下さい。これは僕たち人間の思考論理の本性です。何故なら僕たちは言語で思考するから。全ての地球上の（グローバルな）人間たちの個別言語の本性が此れだから。僕の考へでは、以上の意味でイギリスがヨーロッパではないやうに、そもそも日本はアジアではないのです。誰が日本はアジアだと言つたのだ？極東などといふからには極西の欧米白人種キリスト教徒だらう？これも此の150年来の日本人の西洋東洋二項対立盲信主義の一つなのだらう？といふ事は、

〔註5〕

『Mole Hole Letter（17）：総入れ歯の時代』（もぐら通信第99号）をお読みください。

先日君に送つたメールで、第一次安倍内閣の時の安倍首相の、英文で発表された（2012年）、通称アジア太平洋ダイヤモンド構想といふ正式名称は英語で「自由で開かれたインド太平洋戦略」（Free and Open Indo-Pacific Strategy）による国家戦略は、中国共産党に対する宣戦布告であり（これはアメリカの昨年10月のペンス副大統領によるハドソン研究所でのアメリカの対中国共産党宣戦布告宣言に匹敵するし、この演説は日本の対中国共産党宣戦布告の追認だとみなすこともできるよ：hudson Pense Vice president speech : <https://www.youtube.com/watch?v=mYAHPPXmcts>）、朝鮮半島二国抜き第二次大東亜戦争の戦略書である。といふ僕の理解は正しいのではないか？僕は今第三次世界大戦が始まつたと思つてゐるよ。国際政治学の素人としては余りに形式的に過ぎる理解かもしれないが、かう理解すると全体が見える。歴史は繰り返すとは、此のことではないのだらうか。第二次世界大戦が19世紀の精算をヨーロッパ人には意味してゐたやうに〔註6〕、今度の第三次世界大戦は20世紀の精算に違ひないのだ。どう仕様もない奴らだ。てめえら、いい加減にしろと言ひたいよね。

〔註6〕

この第二次世界大戦は19世紀の決算であることと、次は第三次世界大戦を起こして欧米人は20世紀の決算を凶るだらうといふことは「安部公房の読者にしか書けない『美しい星論』（後半）」（もぐら通信第102号）で言及しましたので、ご覧ください。

日本のマスメディアは、ああ、呑気だね。呑気節といふ流行歌が流行つたのは大正7、8年といふ事ですが、この歌詞は一番の「学校の先生は豪（えら）いもんじゃそうな」を「マスメディアの先生は豪（えら）いもんじゃそうな」と置き換へ、「生徒」を「視聴者」に置き換へ、「天井知らずに物価が騰（あが）つても」を「底値知らずに給料が落ちてても」と言ひ換えれば、極度なデフレ経済の今の日本に通じる。二番まで引用しますが、最後まで聞くと当時の庶民の文化程度の高さを知つて我が身を思はず反省してしまふよ。かういふのを本当の教育といふのではないかな：<https://www.youtube.com/watch?v=BCTOU0S3wqU>

一
♪学校の先生は豪（えら）いもんじゃそうな
豪いから何でも教えるそうな
教えりゃ生徒は無邪気なもので
それもそうかと思うげな ア ノンキだね

二
♪貧乏でこそあれ日本人はエライ
それに第一辛抱強い
天井知らずに物価は騰（あが）つても
湯なり粥なりすすって生きている ア ノンキだね

（以下略：<https://www.youtube.com/watch?v=BCTOU0S3wqU>）

「《歌の終わりに「はは、のんきだね」という囃子詞(はやしことば)が入るところから》大正7年(1918)ごろから流行した俗謡。添田啞蟬坊(そえだあぜんぼう)が社会を風刺して歌ったもの。また、昭和に入って演歌師の石田一松が歌い、人気を博した。」
[[コトバンク：
https://kotobank.jp/word/のんき節-597726](https://kotobank.jp/word/のんき節-597726)]

といふ事は今の時代は大正7年8年頃(西暦1918年、19年頃)に似てゐるのかな?、専門家の意見が聞きたい。だつて、歌詞があまりに今の日本に当てはまり過ぎるよ。大正時代の呑気節は、はは、呑気だね、であるが、21世紀の呑気節は、嗚呼(ああ)、呑気だね、だね。「それに第一辛抱強い/底値知らずに給料は落ちてても/湯なり粥なりすすって生きている」、嗚呼、呑気な日本人だね。カール・マルクス万歳! 共産主義万歳! グローバリズム万歳! 国際金融資本万歳! 極左の内閣総理大臣万歳! 中国共産党万歳! 財務省万歳! 天皇陛下万歳! ひもじい様万歳! 飢餓同盟万歳! 日米同盟万歳! なんでもかんでも万歳!

どうやら、啞蟬坊の狂気が私にも乗り移つたらしいな(ふふふふふふ……)。

全ての価値が等価に遍在する、安部公房の等価交換の、topologyと超越論の、今日も呑気な大八島である。

思へば井上やすしのNHK放送の人形劇ひょつこり瓢箪島は預言的傑作だね。今の日本劣等(列島ではない)は1970年の三島由紀夫の死後はまさしくドリフターズ(漂流者)だよ。

それも、これが一世を風靡したコミックバンドの名前だといふのが効いてゐる。クレージーキャッツもさうだが、彼らは本当は腕の立つジャズメンだからね。今はもかういふ筋の通つて気骨のある藝人が本当にゐなくなつたね。客をただ笑はせりやあいつつてもんぢやねえだらう。

我が愛読せる20世紀バロック小説の大家トーマス・マンに倣つて非政治的な人間であるわたくし目の言葉は、まだまだ尽きないが、ここまでとします。ゾーヴァイト・フュア・ホイテ。
So weit für heute.

歳のせいで2時30分過ぎに目が覚めたのであるが、起きてもする事がないので、かうしてみれば、いろいろな事が深く纏まって、歳をとるのもいい事だと思ふよ。きつと兼好法師の徒然草の出だしの、つれづれなるままにといふのも、年老いて2時30分に目が覚めて、しやうがねえなあ、これぢやあ、やつてられねえとブツブツとボヤキながら書き始めたら、あの平然として辛辣なる傑作ができちやつたのではないかな。

俺も死ぬまでの間に、あの位の文章を書いてみたいよ。

と、かく考へてゐるうちに、♪地球の上に朝が来た♪やうである。♪その裏側は夜だらう♪：
https://www.youtube.com/watch?v=mRD_Yqhz53U

お後がよろしいやうで。

(拍子木の音入る)

リルケの『オルフェウスへのソネット』を読む

(46)

第2部 XXI

～安部公房をより深く理解するために～

岩田英哉

XXI

SINGE die Gärten, mein Herz, die du nicht kennst; wie in Glas
eingegossene Gärten, klar, unerreichbar,
Wasser und Rosen von Ispahan oder Schiras,
singe sie selig, preise sie, keinem vergleichbar.

Zeige, mein Herz, daß du sie niemals entbehrst.
Daß sie dich meinen, ihre reifenden Feigen.
Daß du mit ihnen, zwischen den blühenden Zweigen
wie zum Gesicht gesteigerten Lüften verkehrst.

Meide den Irrtum, daß es Entbehrungen gebe
für den geschehnen Entschluß, diesen: zu sein!
Seidener Faden, kamst du hinein ins Gewebe.

Welchem der Bilder du auch im Innern geeint bist
(sei es selbst ein Moment aus dem Leben der Pein),
fühl, daß der ganze, der rühmliche Teppich gemeint ist.

【散文訳】

わたしのこころよ、お前が知らない庭たちを歌えよ。
清澄で、到達できぬところにある、ガラスの中に水を注ぎこまれた庭たちのように、
イスパハンやシラスの水（川）と薔薇のように、
庭たちを祝福して神聖に歌え、褒め称えよ、誰に比較されることなく。

わたしのこころよ、お前が決して庭なしではいられないことを示せよ。
庭たちの成熟した無花果（いちじく）がお前を思っていることを。
お前が、庭たちの間で、花咲く枝の間に顔面のところでのように高められた空気と
交わっていることを。

既に起きた決心、即ち、あれ、存在するのだ、という決心
無しでも済ますことができるということがあるのだという過ちを回避せよ。
お前は、絹の糸の織物の中へと入って来たのだ。

お前が内部において、像のうちのどんな像とひとつになっていようとも
(それが、たとえ、苦痛の生の中から生まれる一瞬であろうとも)、
完全な、光栄ある絨毯が言われている(意味されている)のだということを感じよ。

【解釈と鑑賞】

庭という言葉は、何かどこか、全く別の世界を思わせる言葉です。それは、家と隣接していながら、家から最も遠い世界である。確かに、こう考えてみると、庭はリルケの世界です。人と人の距離がそうであるように。しかし、これは、リルケばかりではなく、世界中にある庭という庭が、人間にとっては、そのようなものなのではないでしょうか。そのようなものとしての庭は、第2部ソネットXVIIにも歌われておりました。

さて、このソネットは、話者が自分自身の心臓、こころに向かって、自分自身の知らないところにある庭という庭をみな褒め称えよと歌っているソネットです。わがところが「知らない庭たち」というところに、前のソネットの最後の連が響いていると思います。それは、どこにもない場所を歌っているのです。リルケは、よくこのような発想をする。第2部ソネットXIの第3連でも、見る者の見えない場所にまで、悲しむことの息がどれも存在するようにと歌っておりました。それは、空間の詩人、宇宙の詩人としては、やはり、想像力の及ぶ限り、またそれを超える空間にまで、思いを馳せるといことなのでしょう。ここでは、いつも内と外、内部と外部が意識されることになる。

第1連では、鉢の中にあつて、水を注いだ小さな水中の庭園という細工物があるのでしょう。その庭の中には確かに入ることはできず、水があることから、それはklar、クラール、清澄でした。このklar、クラール、清澄という言葉もリルケの言葉でありました。第1部ソネットIの第2連に出てくる動物たちの棲む森は清澄な森でした。その他あちこちで頻出するこの言葉の意味を考えると、それはほとんど、rein、ライン、純粹なというリルケ好みの言葉と変わらないのです。Reinは明瞭に時間を欠いている形容ですが、klarは、どちらかというとその語義からして、やはり透明で澄んでいるということ、その様子が重きがあるのだと思います。リルケのrein、ライン、純粹なという言葉についての考察は、「リルケの空間論(個別論4)：悲歌5番」(2009年8月14日：http://shibunraku.blogspot.com/2009/08/5_14.html)に詳述しましたので、そこをご覧ください。

そうして、そのような到達できない庭の名前として、イスパハンやシラスの名前を挙げ、庭の造作である、水、川や薔薇のことを歌っています。

第2連では、わがところに向かい、そのような到達できない清澄な庭がお前には必要だ、それがなしでは、ところは存在しないということを歌っています。

「顔面のところでのように」とあるのは、顔が内部の空間と外部の空間の交換される場所だからです。これは、リルケの思想でした。悲歌1番でも、天使は外に流出した美を顔の中に回収するのです。これは美ですが、しかし、そのほかの例もみても、確かに顔はもの、空間が出入りをする場所なのです。そうして、ところは、その庭で、花咲く枝々の間にある空気、空間と交流し、交わるのです。交わるとは、交換するということでしょう。

そうして、第3連では、存在するためには、真にあるためには、変わらずあるためには、そうして、そうあるぞと決心するためには、もう既に決心したのだから、その決心がなくてはいいなどと思いついてはいけません。何故ならば、わがところよ、お前は、既に、絹の糸で織られた織物の中へと入ったからだ。

織物に譬えたことは意味があります。これは、垂直と水平の糸から織られる構築物だからです。この同じ構造を備えたものが、薔薇です。花の好きなリルケが、宇宙の究極の構造の象徴として歌った薔薇、自らの墓碑銘に遺言した薔薇です。入籠構造の宇宙。

さて、こうしてみると、この話者は、死んだオルフェウスと考えることができると思います。

「完全な、光栄ある絨毯が言われている（意味されている）のだ」とはどういうことでしょうか。この絨毯という言葉から、わたしたちは直ぐ悲歌5番に歌われている絨毯を思い出すことができます。その絨毯とは、場所であり、従い空間であり、そこでは、宇宙が中心を見出して、万物が均衡して、その真理を現出せしめている空間なのです。この空間については、「リルケの空間論（個別論2）：悲歌5番」（2009年8月9日：<http://shibunraku.blogspot.com/2009/08/2.html>）にて詳細に論じましたので、そこをご覧くださいと思います。この空間は、何度かソネットを論ずる中でも言及しましたが、この場所では、悲歌のその絨毯を歌った核心の場所のひとつを引用しますと、

wo sich das reine Zuwenig unbegreiflich verwandelt -, umspringt in jenes leere Zuviel. Wo die vielstellige Rechnungszahlenlos aufgeht.

そこでは、純粹な過少が、何故かは解らないが、不思議なことに、変身し、跳躍して、

あの空虚な過多に、急激に変化する。そこでは、桁数の多い計算が、数限りなく、無限に開いて行く。

そのような場所、そのような空間なのです。

このような空間が、入籠構造をしていること、リルケの薔薇と同じであることは、「リルケの空間論（個別論2）：悲歌5番」（2009年8月9日：<http://shibunraku.blogspot.com/2009/08/2.html>）にて論じた通りです。このソネットの第1連に、到達し得ない、清澄なる空間に薔薇が咲いているという言葉は、故無しとはしないのです。このようにして、確かにこのソネットの第1連で歌われている庭たちは、第4連で歌われている通りに、そこでは「完全な、光栄ある絨毯が言われている（意味されている）」のです。連の詩想は首尾一貫して連なっております。

水が流れ、川が流れているということも、今までのソネット、例えば第1部ソネットX、第2部ソネットVII、第2部ソネットXV、第2部ソネットXXIVなどをみると、それは豊かなものの象徴であり、万物の間をへ巡り流れるものであり、死の傍をも通り、また死にかけている花をも蘇生さえ、そしてまた、それは私達人間の生の姿でもあります。

第4連の「お前が内部において、像のうちのどんな像とひとつになっていようとも」という言葉は、内部とあるからといって何もリルケに特有の表現なのではなく、こうしてみると、わたしたちはいつもこのようにして生きているのだと思うことができます。わたしたちはいつもどこにもない空間、到達できない空間を思い願って生きている。たとえそれが苦しみの像であったとしても。そう願うならば、確かにその空間は存在しているのです。

【安部公房の読者のためのコメント】

我ながら、次の第一連の解説は、安部公房の透明感覚の説明になつてゐると思ひました。初期安部公房の『水中都市』や『洪水』や、『砂の女』の最後で仁木順平が砂の中に作った装置に溜まる水や『方舟さくら丸』の最後の景色の透明を思ひ出して下さい。其の思ひで読むと一層、リルケと安部公房の深い関係が判ります：

第1連では、鉢の中にあつて、水を注いだ小さな水中の庭園という細工物があるのでしょうか。その庭の中には確かに入ることはできず、水があることから、それはklar、クラール、清澄でした。このklar、クラール、清澄という言葉もリルケの言葉でありました。第1部ソネットIの第2連に出てくる動物たちの棲む森は清澄な森でした。その他あちこちで頻出するこの言葉の意味を考えると、それはほとんど、rein、ライン、純粹なという

リルケ好みの言葉と変わらないのです。Reinは明瞭に時間を欠いている形容ですが、klarは、どちらかというとその語義からして、やはり透明で澄んでいるということ、その様子に重みがあるのだと思います。

その庭の中には確かに入ることはできない筈の存在の透明なる庭である空間に入るには『バベルの塔の狸』のアンテン君の方法しかない、とらぬ狸に不意に頭を殴られて気絶して気がついてみたら塔の内部にいつの間にか入ってしまったといふ超越論的な方法以外の方法（これを此の作品ではシュールレアリズムの方法と作者は呼んでゐますが）はないのでした。

「「顔面のところでのように」とあるのは、顔が内部の空間と外部の空間の交換される場所だからです。これは、リルケの思想でした。」とあるのは、これもそのまま安部公房の思想でした。『他人の顔』といふ名作を思へば十分でせう。「顔というやつは玄関のようなものだ。」（『私の顔』全集第30巻、50ページ）顔は他者との通路である。といふことも何処かで述べてゐます。

また、水の流れについて歌つてゐる、

「水が流れ、川が流れているということも、今までのソネット、例えば第1部ソネットX、第2部ソネットVII、第2部ソネットXV、第2部ソネットXXIVなどをみると、それは豊かなものの象徴であり、万物の間をへ巡り流れるものであり、死の傍をも通り、また死にかけている花をも蘇生さえ、そしてまた、それは私達人間の生の姿でもあります。」

といふ箇所を、私達は箱根隠棲時代の仕事場の周囲に、下水溝に見ることができます。『安部公房の箱根の仕事場とご贔負のレストラン「ブライト」を尋ねる～存在の部屋と『もぐら日記』の中のレストラン～』（もぐら通信第49号）より引用します：



リルケが水の流れを主に川に求めるのに対して、安部公房はもぐらでありますから、上の写真のやうに木枠の窓から眺める下水道の水の流れになつて、更に、同号から引用すれば、次のやうな水となつてゐる：

「これに、しかし考えてみれば、この下水道の水にそっくりなものを、私たちは知っております。それは、『箱男』の写真8枚のうちの1枚で、男子便所の写真の下にある次の詩のことです。

「滑り止めの溝を刻み、枯葉色のぶちを散らせた堅焼きの白タイル。その溝を伝って静かにうねっている、細い水の流れ……いったん水溜りをつくり、再び流れ出し、ドアの下に消える。」」（全集第24巻、110ページ）

安部公房の世界である。

Mole Hole Letter (19)
朝日新聞の労組副委員長 (36歳) の
自殺は何を意味するか

岩田英哉

【ネット記事】

<https://news.yahoo.co.jp/byline/hanadakazuyoshi/20190522-00126883/>

朝日新聞の労組副委員長 (36歳) が自殺したといふ報道を耳にしましたので、思ふところ多々あり、Mole Hole Letterの題名の元に以下のことを記す。「五月十三日午後六時五十分、多摩川の水面で朝日新聞労働組合副委員長・K氏 (35) の遺体が発見されたとのことです。」 (<https://ch.nicovideo.jp/shukanbunshun/blomaga/ar1765729>)

記事によれば、経営側が要求する賃金カットの額は今回は一人平均165万円。恐らく朝日新聞社の労組の組合員と経営者の間に立つて交渉したが、しかしもはや身の置き所がなくなつての自殺かと私は推測します。36歳といふ若さに傷 (いた) ましいものを感じる。

私の実社会の見聞では、理由の如何を問はず給与が削減されると、社員は間違いなく会社に対する忠誠心を喪失します。これはドイツ人も言つてゐたので (ドイツ国内で自分も経験したか、他社の例を見聞したのだらう)、ドイツもさうであるし、ドイツに限らず、お金のことであるから他の国でも皆さうだと云へると、経験的にも思ふ。私も経験したことがありますので、此処になす論は私の経験を一般化したものでもあるのです。

一人平均165万円の年収カット、などといふのは前代未聞の金額です。即ち金に換算すれば、朝日新聞社の社員の会社に対する忠誠心は今の物価で年額165万円であつたといふことだ。

共産主義 (マルクス主義) の特徴は、その経済体制のしからしむるところ (売買行為の否定) が原因で、そのなすことは、私の東ドイツ滞在看聞記 (マルコポーロの向かふを張つて、以後「西方共産主義見聞録」と呼びたい) の書き溜めたメモの一部を此処で引用するとすれば、売買行為の否定といふことから、共産主義とは、共産党による、

- (1) 外国の諸物の窃盗と
- (2) 闇市場の追認と
- (3) それまでの先人の蓄財した遺産 (文化的精神遺産も含む) の切り売りの

これら三つしかないのだ。

私の子供の頃1960年代の高度経済成長期の地方都市の市長首長のしたことは都市の政治の経営ではなく、上記(3)のことだつた。私の生まれ育つた人口20数万人の道東支庁所在地も振り返れば俗称革新市政は同じだつた。それは何故かと云へば、共産主義は、売買といふ人間の行為を認めないからです。これが共産主義の致命的な弱点だ。だから、アメリカのトランプ大統領の対中国共産党戦略(政策ではない)は決定的に正しい。日本も、悔しいが猿真似すべきです。もはや「無国籍の猿」(こんな猿はみないが)並みのお笑ひ国会議事堂であり、猿並みの経団連の社長たちであり、「無国籍の猿」である霞が関の行政官僚であるならば尚のこと、さうすべきである。猿知恵すらない人間を人間と呼ぶことができやうか? 中学校か高校の時に漢文の時間に教はつた朝三暮四といふ『荘子』の話に出てくる猿ににそつくりな今の権力枢要にゐる日本人たちである〔註1〕。

〔註1〕

「あるサル使いの親方が栃の実を与えようとして『朝は三つ、夜四つにするぞ』と言うと、サルたちはみな怒った。そこで親方が『それでは朝四つにして、夜三つにしよう』と言うとサルはみな喜んだ」という
(<http://chugokugo-script.net/koji/chousanboshi.html>)

この頃私は、人類といふことばの使用をやめて、その代わりに其の上位概念である霊長類といふ言葉を主語にしてゐる。何故なら、グローバリズムといふ共産主義によつて、人類はチンパンジーやマントヒヒやナマケモノやオランヌータンや上野動物園のニホンザル並みになつてしまつたからだ。(こんなことをいふと人間以外の霊長類が怒るだらう。) 霊長類といふ言葉にしなければ、人類といふ言葉を救ふことができないのだ。(人類其のものは、地獄へ墮ちろ!であるが。) ふと思へば、この地球上で金を儲け、そのために嘘を平氣ついて恥じない生き物は人間だけである。義務教育で教へらるべきは、この事実ではないのか。これを道徳の時間に教へたら良いのだ。

朝日新聞で起きたことは、他の20世紀の一斉同報型マスメディアでも起きてゐる筈です。彼らの脳味噌は上記の通り売買を否定し相場を否定し市場を否定した共産主義なので、経営と称して、資産の切り売りしか脳がない。後の手立てを思ひつことができないのが哀れである。かうして考へてくれば、結局「戦後」70有余年の誤訳偽装偽善国家日本〔註2〕を支えてきた左翼・共産主義の、この日本国家に対する年間の忠誠心は、今の物価で、それも朝日新聞といふ最大最高の戦後利得者集団であつても其れが年間165万円であるならば、其の事業規模と利益率に応じて、朝日以下毎日読売日経産経新聞、それから同類20世紀型マスメディアである地上波の放送局の社員の忠誠心も金で計算できるだらう。そして、その忠誠心の金額分を社員数X忠誠心金額といふ計算式で計算すれば、どれ位売り上げを落とし、どれ位の利益を減額させれば、これら20世紀型マスメディアが一斉に崩壊するかを計算して、戦略的に仕掛けること、カウンタープロパガンダで仕掛けることができる。この計算を誰かやつて見ないか? といふことは、他方、日本の国家の視点で見ると、現下の極端なデフレ経済は、日本国民の国家への忠誠心も毀損するといふこ

とである。私の目には経済政策以外の政策とも相俟つて、今の政権は極左政権であると映る。「戦後」左翼・共産主義者にとって最高の政権が実現したのに、何故反対ばかりをしてゐる「戦後」左翼・共産主義者なのであろうか？

[註2]

この問題については『安部公房とチョムスキー（11）』（もぐら通信第93号）にて詳細に、ヨーロッパのヘーゲル、マルクス、キリスト教、マルクス主義と共産党を始め、その影響下にあつたGHQの問題も含め、「戦後」の国際的な枠組みおよび現行日本国憲法の虚妄と頹廢と偽善とモドキ（擬き）を言語と誤訳の観点から論じました。第93号のダウンロードは：<https://docdro.id/d4oVyfR>

デフレによる実質所得の目減りと自殺率に相関関係があるといふことに調べてなつたら、我が国民の道徳の状態は相当にこれはまずいといふ証明になる。といふことを此の若い労組の指導者であつた36歳の若者の自殺は教へてくれてゐる。労組員の労組への「戦後」忠誠心も今の物価で165万円であつたといふことである。彼等にとっての日本の国の価値は165万円であつたといふことである。日本全国総労組員数X忠誠心金額（165万円）といふ計算式で計算すれば、21世紀の令和の初年度の労働組合員の労組への忠誠心の最大合計が金で計算できるといふことになる。

これがアメリカ人ならば、3年後の日本を企業に見立てた場合の企業価値は何々兆円であるから、それから逆算すると今の日本の国の価値はカクカクシカジカであると説明して、計算のための方程式まで用意して（私は上場前の企業価値を評価するためのアメリカ人の作った計算式を二種類見たことがある）、政治家もウォール街のビジネスマン並みに詐欺的な言辞を弄するところであるが、人類絶滅希少種である我が愛する愚かなる日本民族は、希少種であるが故に、これができないのである。宇宙観が大陸とは違ふからです[註3]。これを放つて置いた自称他称「戦後」保守の内輪ぼめの輩はみな死刑である。何故なら、「戦後」保守は左翼・共産主義者と同じ穴の貉だからです。この労組の指導者であつた若者の死を犬死にすることなく、後世生まれ来たる子供たちのために活かすには、右翼・自由民主主義「戦後」利得者の忠誠心を今の物価で計算しては如何か？さうすべきである。

[註3]

日本人の宇宙観については『安部公房とチョムスキー（8）』（もぐら通信第81号）の第7章「7. 一神教と大地母神崇拜をtopologyで読み解く」で論証した通りです。同号のダウンロードは：<https://www.docdroid.net/v2p5WaF/81.pdf>

この36歳の若者の死は（何故表に氏名が公表されないのか）、今まで碌でもない団塊の世代を始めとして（勿論誠実な人のゐることも知つてゐます）其れ以降の左翼・共産主義者の「戦後」初めての自殺ではないだらうか。

ある時、私は日本の哲学史を調べてみて、「戦前」の左翼・共産主義者には獄死する人たちが何人もいたことを知り、その人生の記述を読みながら不覚にも落涙しそうになったことがある。右翼も左翼も日本の国はこれでは駄目だ、かう考へ、かうすれば良くなるといふことに、要するに自分のためにではなく世のため人のために自分の命を懸けてみたからです。だから、この若者は恥を知つてゐたといふことを自殺によつて証明し、身の潔白を証明したのでありますから、実は此の若者は外見上の労組の身分や地位あるにも拘らず、「戦後」左翼・共産主義者ではありません。昔はかうやつて右と左は意見が対立しても、十分に話ができてゐたのだと思ふ。哲学者田中美知太郎さんが、昔は何事も上等であつたと書いてゐる一行を読んだことがあるが、その通りであると思ふのである。今は何事も下等である。「戦後」左翼・共産主義者で思想に殉じるか自己に思想を殉じさせた人間〔註4〕が、この若者以外に、一体何人ゐるか教へてもらひたい。

〔註4〕

三島由紀夫の死後1972年1月1日(といふ事はインタビューの実際は前年度 前月)に、安部公房は三島由紀夫の此の死を、古林尚とのインタビューで、次のやうに語つてゐる。：

「古林(略)

思想を殉じさせる。

安部 そうでしょう。だから思想に殉じたんじゃないくて、思想を自分に殉じさせたという事だ。ふつう、とかく思想に殉ずるといふ形で考えがちだけど、必ずしも思想に殉ずるんじゃないくて、思想を自分に殉じさせるということだつてあるでしょう。」(『共同体を否定する文学』全集第23巻、301ページ上段)

文学の世界は文学である以上、それはもともと狂気の世界であるから、世間が正気を失つてゐることに無自覚な即ち狂気倒錯の世間であるならば、目には目を歯には歯を狂気には狂気を以つて対抗し、生きる以外にはない。安部公房の世界は元々「終りし道の標べに」から人生を始めるといふ、世間から見れば倒錯と狂気の世界でありアベコーボーの世界はアベコベの世界であるからして、私たち読者は何も特別なことをする必要のないといふことが有り難いことである。狂気は私たちの日常である。

安部公房、三島由紀夫、石川淳、川端康成の四人で出した中国共産党の毛沢東の起こした文化大革命に対する反対声明の直後の座談会を読むと、石川淳の発言は、安部公房の師匠らしく誠に過激であり、過激がラジカル(radical)ならば、英語の原義に戻つて日本語に訳すれば誠に根源的(radical)である。特に三島由紀夫との河原乞食作家論は、石川淳と三島由紀夫の間に交はされた、座談中最高の対話と私には見える。此処ではさすがの安部公房も師匠の前では色褪せて見える。上述の倒錯して無自覚に気の狂つた世間から見れば、腹を搔(か)つ捌(さば)いた三島由紀夫も狂気の人であらう。しかし文学から見れば正気の人である。川端康成もまたガス管を口に啜へて自殺をした以上世間から見れば狂気の人である。しかし文学から見れば正気の人である。といふことは、

自殺をせずに生きるといふことが正気であることの証明である。

といふとんでもない令和初年の世の中になつてゐるといふことである。これが、多分このまま令和といふ時代である。

これが、この日本人の若者の自殺の意味するところだと私は思ふ。そして、詳述はしないが、何故木で首を括るのではなく、ピストルや刃物で自殺をするのではなく、川の水に身を浸（ひた）しての入水自殺であつたのかといふことの根底にある深い古代的・伝統的・文化的な意味は、右翼・保守の著名な論客西部邁氏の同じ多摩川の川水での入水自殺と併せて、平成末年令和元年に亘る歴史の激動の境目にあつて此れ以降も生きる二人の死だと思ふのである。人の死であるからには、著名か無名かは関係がない。これを古来、人は死ねば仏になるのだ、と言ひならはしてきたのだ。もし機会があれば、既に書き終つて筐底にある私の西部邁論の一部を転載することがあるかも知れない。私の考へでは、西部邁氏と此の若者の死に最も親しく近い日本の河原乞食作家は井伏鱒二です〔註5〕。人間の人生と生命の奥は深く、自分の制御できる事柄の範囲は誠に狭い。従ひ人間はそもそも不自由である。かくあればこそ、言論の自由は文字通りに有り難きものである。私は共産主義に支配されたいとは露思はないし、其れどころか、この絶対悪は絶滅させねばならないと思ふつてゐる。と、この絶滅危惧種の一人がいふのである。私の『西方共産主義見聞録』のメモは余りに過酷異常である。誰にとつてか？勿論共産党によつて支配される東ドイツ国民にとつてである。今の中国共産党がウイグル、チベット、モンゴルその他の周辺民族の国々を如何に侵略して民を虐殺し、ソヴィエト連邦共産党と同様に収容所をつくつて（これはナチスと同じである）、嘘を平気つきながら弾圧を繰り返して来たし、今も如何にさうしてゐることか。これを報じない20世紀型マスメディアには道德の頹廢があり、これを糾弾しないお笑ひ国会議事堂にも道德の頹廢があり、経団連の猿未満の猿たちは売春婦ならぬ売春夫である。即ち、人間としての恥を知らないのだ。もし恥を知るといふ道德心があれば、事実を過不足なく報道し、理解し、対処できるだらうに。かくして、何度でもいふが、日本国家は金がもらへれば中国共産党に幾らでも媚びを売る（本当は喜んで大股を広げると云ひたいところであるが私は言はない）売春夫国家である。日本の男の一分は立たず、一物も立たないインポテンツ（性不能）国家である。

〔註5〕

『山椒魚ともぐら』と題して井伏文学の本質を論じました。ダウンロードは：

- (1) 『山椒魚ともぐら (1) -井伏鱒二の形代(かたしろ)と安部公房のtopology』 (もぐら通信第63号) : <https://docdro.id/cfTWuiX>
- (2) 『山椒魚ともぐら (2) -祖父と孫、父と息子の話-』 (もぐら通信第65号) : <https://docdro.id/J0mVoUA>

私は、安部公房の読者であつてよかつたと、しみじみと思ふのだ。ちなみに、安部公房全集ご担当の編集者にして『安部公房・荒野の人』の著者宮西忠政氏に直接伺つたことがあるが、安部公房全集は黒字ださうです。他方、三島由紀夫全集の編纂に携（たづさ）はつた斯界著名の三島文学の批評家田中美代子氏に此れも直接伺つたところによれば、安部公房全集の装幀は素晴らしい出来であり、三島由紀夫全集はとても敵（かな）はないといふ

ことです。お二人の言葉を以って、

安部公房の読者の皆さんに於かれては、これまでも増して、安心して、一層に狂気に満ちた人生を歩んでもらひたい。

私は扇動してゐるのではない。『終りし道の標べに』『名もなき夜のために』『S・カルマ氏の犯罪』『砂の女』以降『箱男』や『密会』や『カンガルー・ノート』といふ表通りのある作品のことを思つて見れば、それで十分ではありませんか。

追伸：165万円に日本の国の総労働人口者数をかけたものが、1970年（昭和45年）に三島由紀夫が「無機的な、からつぽな、ニュートラルな、中間色の、富裕な、抜目がない、或る経済的大国が極東の一角に残る」といつた其の日本の国の49年後の値段である。

165万円×6687万人＝1103355万円（110億円）〔註6〕

110億円とは随分と安い値段である。これほど安い国であるからには、三島由紀夫の予言は一部はあたつたといふべきである。といふのは、確かに日本は「無機的な、からつぽな、ニュートラルな、中間色の、しかしデフレで貧乏で、間抜けな、或る経済的偽装大国」として「極東の一角に残」つてゐるからである。かく三島由紀夫の言葉を引き写してみれば、「残つてゐる」といふ語を作家が選択して創造した文脈は、残飯のやうに残つてゐるといふ意味であり、食い散らかして道端に捨てられたマクドナルドのハンバーガのやうに残つてゐるといふ意味である。確かに「残つてゐる」110億円の日本である。

110億円の日本の値に対抗して生きて均衡を産み出すために逝つた36歳の、自分自身に正直に生きた無名の若者に合掌するものである。

〔註6〕

直近の総労働人口数は労働省の「労働力調査（基本集計）平成31年（2019年）3月分（速報）」によつた：<https://www.stat.go.jp/data/roudou/sokuhou/tsuki/pdf/201903.pdf>

連載物・単発物次回以降予定一覧

- (1) 安部浅吉のエッセイ
- (2) もぐら感覚23：概念の古塔と問題下降
- (3) 存在の中での師、石川淳
- (4) 安部公房と成城高等学校（連載第8回）：成城高等学校の教授たち
- (5) 存在とは何か～安部公房をより良く理解するために～（連載第5回）：安部公房の汎神論的存在論
- (6) 安部公房文学サーカス論
- (7) リルケの『形象詩集』を読む（連載第15回）：『殉教の女たち』
- (8) 奉天の窓から日本の文化を眺める（6）：折り紙
- (9) 言葉の眼12
- (10) 安部公房の読者のための村上春樹論（下）
- (11) 安部公房と寺山修司を論ずるための素描（4）
- (12) 安部公房の作品論（作品別の論考）
- (13) 安部公房のエッセイを読む（1）
- (14) 安部公房の生け花論
- (15) 奉天の窓から葛飾北斎の絵を眺める
- (16) 安部公房の象徴学：「新象徴主義哲学」（「再帰哲学」）入門
- (17) 安部公房の論理学～冒頭共有と結末共有の論理について～
- (18) バロックとは何か～安部公房をより良くより深く理解するために～
- (19) 詩集『没我の地平』と詩集『無名詩集』～安部公房の定立した問題とは何か～
- (20) 安部公房の詩を読む
- (21) 「問題下降」論と新象徴主義哲学
- (22) 安部公房の書簡を読む
- (23) 安部公房の食卓
- (24) 安部公房の存在の部屋とライプニッツのモナド論：窓のある部屋と窓のない部屋
- (25) 安部公房の女性の読者のための超越論
- (26) 安部公房全集未収録作品
- (27) 安部公房と本居宣長の言語機能論
- (28) 安部公房と源氏物語の物語論：仮説設定の文学
- (29) 安部公房と近松門左衛門：安部公房と浄瑠璃の道行き
- (30) 安部公房と古代の神々：伊弉册伊弉諾の神と大国主命
- (31) 安部公房と世阿弥の演技論：ニュートラルといふ概念と『花鏡』の演技論
- (32) リルケの『オルフェウスへのソネット』を読む
- (33) 言語の再帰性とは何か～安部公房をよりよく理解するために～
- (34) 安部公房のハイデgger理解はどのやうなものか
- (35) 安部公房のニーチェ理解はどのやうなものか
- (36) 安部公房のマルクス主義理解はどのやうなものか
- (37) 『さまざまな父』論～何故父は「さまざま」なのか～
- (38) 『箱男』論II：『箱男』をtopologyで解読する
- (39) 安部公房の超越論で禅の公案集『無門関』を解く
- (40) 語学が苦手だと自称し公言する安部公房が何故わざわざ翻訳したのか？：『写真屋と哲学者』と『ダム・ウエイター』
- (41) 安部公房がリルケに学んだ「空白の論理」の日本語と日本文化上の意義について：大国主命や源氏物語の雲隠の巻または隠れるといふことについて
- (42) 安部公房の超越論
- (43) 安部公房とバロック哲学
 - ①安部公房とデカルト：cogito ergo sum
 - ②安部公房とライプニッツ：汎神論的存在論
 - ③安部公房とジャック・デリダ：郵便的（postal）意思疎通と差異
 - ④安部公房とジル・ドゥルーズ：褻といふ差異
 - ⑤安部公房とハラルド・ヴァインリッヒ：バロックの話法
- (44) 安部公房と高橋虫麻呂：偏奇な二人（strangers in the night）
- (45) 安部公房とバロック文学
- (46) 安部公房の記号論：《 》 〈 〉 () [] 「 」 『 』 「……」
- (47) 安部公房とパスカル・キニャール：二十世紀のバロック小説（1）
- (48) 安部公房とロブ＝グリエ：二十世紀のバロック小説（2）

- (49) 『密会』論
- (50) 安部公房とSF/FSと房公公安：SF文学バロック論
- (51) 『方舟さくら丸』論
- (52) 『カンガルー・ノート』論（済み）
- (53) 『燃えつきた地図』と『幻想都市のトポロジー』：安部公房とロブ＝グリエ
- (54) 言語とは何か II（済み）
- (55) エピチャム語文法（初級篇）
- (56) エピチャム語文法（中級篇）
- (57) エピチャム語文法（上級篇）
- (58) 二十一世紀のバロック論
- (59) 安部公房全集全30巻読み方ガイドブック
- (60) 安部公房なりきりマニュアル（初級篇）：小説とは何か
- (61) 安部公房なりきりマニュアル（中級篇）：自分の小説を書いてみる
- (62) 安部公房なりきりマニュアル（上級篇）：安部公房級の自分の小説を書く
- (63) 安部公房とグノーシス派：天使・悪魔論～『悪魔ドゥベモウ』から『スプーン曲げの少年』まで
- (64) 詩的な、余りに詩的な：安部公房と芥川龍之介の共有する小説観（済み）
- (65) 安部公房の/と音楽：奉天の音楽会
- (66) 『方舟さくら丸』の図像学（イコノロジー）
- (67) 言語貨幣論：汎神論的存在論からみた貨幣の本質：貨幣とは何か？
- (68) 言語経済形態論：汎神論的存在論からみた経済の本質：経済とは何か？
- (69) 言語政治形態論：汎神論的存在論からみた政治の本質：政治とは何か？
- (70) Topologyで神道を読む（1）：祓詞と祝詞と結界のtopology
- (71) Topologyで神道を読む（2）：結び・畳み・包みのtopology

[シャーマン安部公房の神道講座：topologyで読み解く日本人の世界観]

- (71) 超越論と神道（1）：言語と言霊
- (72) 超越論と神道（2）：現存在（ダーザイン）と中今（なかいま）
- (73) 超越論と神道（3）：topologyと産霊（むすひ）または結び
- (74) 超越論と神道（4）：ニュートラルと御祓ひ（をほらひ）
- (75) 超越論と神道（5）：呪文と祓ひ・鎮魂
- (76) 超越論と神道（6）：存在（ザイン）と御成り
- (77) 超越論と神道（7）：案内人と審神者（さには）
- (78) 超越論と神道（8）：時間の断層と分け御霊（わけみたま）
- (79) 超越論と神道（9）：中臣神道の祓詞（ほらひことば）をtopologyで読み解く：
古神道の世界観
- (80) 三島由紀夫の世界観と古神道・神道の世界観の類似と同一
- (81) 安部公房の世界観と古神道・神道の世界観の類似と同一
- (82) 『夢野乃鹿』論：三島由紀夫の「転身」と安部公房の「転身」
- (83) バロック小説としての『S・カルマ氏の犯罪』
- (84) 安部公房とチョムスキー
- (85) 三島由紀夫のドイツ文学講座
- (86) 安部公房のドイツ文学講座
- (87) 三島由紀夫のドイツ哲学講座
- (88) 安部公房のドイツ哲学講座
- (89) 火星人特派員日本見聞録
- (90) 超越論（汎神論的存在論）で縄文時代を読み解く
- (91) 「『使者』vs.『人間そっくり』」論

●『周辺飛行』論（16）：箱男 予告編—周辺飛行13：結局天才とは、一つの論理と一つの形象の本質を一体どれ位の深さと広さにまで如何様にも実に精妙に展開してみせることのできる能力なのかと此の予告編を見て思ふ。それは恰も自己であるがごとき何か、即ち形象（イメージ）其のものである。ショーペンハウアーならばこれを表象と呼んだだらう。そして其の根底は無である。万物は関係の中にあるから。氷の中を除いては。●By・Way—『第四間水期』について：草下英明さんといふ方は私が小学生の頃よくNHKの番組に出て科学についての解説をしてくれるよい啓蒙家の叔父さんでした。安部公房の『第四間水期』についても書いてみたとは。文藝評論家には書けない『第四間水期』論です。久しぶりで草下さんに懐かしくもお会ひした気持ちがあります。●安部公房の発明空間とファシズム：久間十義といふ作家の指摘は正鵠を得ています。その指摘は、安部公房が三島由紀夫と共有してみた接点の一つで、そして懸念のファシズムになることから逃れ得る唯一の地点でもあるのです。安部公房は三島由紀夫を決してファシストとは呼ばなかった。と死後に堤清二が贖月報で証言してゐる。その脱出の地点が第二章に追加した安部公房の言語機能論です。●『燃えつきた地図』の団地風景（1964年）：何かをネットで調べてみて見つけた動画です。今や此の団地の至るところのものは、東京で見かけると何か廃墟のやうにひっそりとしてゐて、遊園具に子供はゐないし、店舗もシャッターが降りてゐて通りも閑散としてゐる。こんな高度経済成長の時代があつたのかと動画を見て思ひました。確かに、個人の成長と会社の成長と国家の成長が同じ軌跡を描いて急上昇して行く、国民にとつて幸せな時代でした。これがどの位に素晴らしい狂気に満ちてゐた時代であつたかは、クレージーキャッツの植木等主演のサラリーマン無責任男の東宝映画をご覧ください。名は体を表す通りに1960年代はクレージー（狂気の）猫の時代でした。そして1970年代、三島由紀夫の死以降の時代はドリフターズといふ漂流者の時代でした。多分見かけはどうあれ、依然として日本の国も国民もドリフターズなのではないか？そして文学も。●サンチョ・パンサを求めて（2）：Brexit（ブレグジット）の深い衝撃：夜いつもドイツ語圏へ行つて此のtageschau（ターゲス Schau）といふ報道番組を見ます。英語に番組名を直訳すると、Today's Showといふことですが、英語のshow businessのshowといふ意味ではなく、まあ、それでも今日の見せ場か、見ものかといふ意味ではあるでせう。今日一日を振り返つてといふところでせうか。ドイツとヨーロッパの様子が判ります。歴史は繰り返してゐる。現下令和の日本も同じです。●リルケの『オルフェウスへのソネット』を読む（46）：第2部 XXI：庭を歌はぬ詩人はゐない。ここから詩が生まれるからでせう。庭とは何か？母屋に従属してゐると見えるものの方にこそ主体が備はり、母屋を巡る物事を動かしてゐる。フレドリック・ブラウンの短編で忘れ難いのは、炎天下の一本道をロバを引く男がトボトボとやつて来て、見かけた方の男がやつと気がつくところでは、ロバが宇宙人で人間の男に口パクをさせて操つてゐたといふ落ちの短編があるのを思ひ出しました。SF作家といふのは宇宙のことを考へる人種なので、どこか必ずtopologyに触れてゐるのだと思ふ。さういへば宇宙は紐の振動から生まれたといふ紐理論の紐もtopologyの論理です。紐が本質の形象ならば、時間の中で必ず周期的に振動するから。子供の時に私達が縄跳びをするのは何故か？縄も紐も安部公房の世界では重要なtopologyの素材です。●Mole Hole Letter（19）：朝日新聞の労組副委員長（36歳）の自殺は何を意味するか：若者が二項対立の狭間に挟まれて自殺をしたといふことが傷ましい。そんな碌でもない場所からは安部公房の主人公のやうに失踪してしまへばよいのだ。過去にも同じ原因で自殺をした若い女性の記事のあつた時に同じやうに思つたことがあります。そして、同じやうにかう思つた。安部公房を読んで欲しかつた、と。さうすればみづからの命を救ふことができたかも知れない。死者の前では不謹慎な言ひ方かも知れませんが、安部公房のこれまでの読者以外の人に、21世紀の特効薬、令和時代の秘薬安部公房を読んでもらひたい。しかし、時代のカウンター・バランスはいつも少数者です。そしてエロスに満ちてゐる。私は此の真理をゲーテの或る詩に学びました。世間はいつも狂気に、文学はいつも正気に。とは私。そして文学はいつも眠りたいのに、世間はいつも踊らずにはゐられない。とはドイツの作家シュトルムの詩。●では、また次号

差出人：

廣安部公房

〒182-0003東京都調布
市若葉町「閉ざされた無
限」

次号の原稿締切は超越論的にありません。いつでもご寄稿をお待ちしています。

次号の予告

1. 『周辺飛行』論（18）
2. 安部公房の縄文紀元論（1）：一般論
3. 私の本棚：西尾幹二著『あなたは自由か』を読む～自由と奴隷について～
4. 哲学の問題101（11）：愛（Liebe：リーベ）
5. 大久保房雄を読む（1）：文壇とは何であつたか
6. リルケの『オルフェウスへのソネット』を読む（48）
7. サンチョ・パンサを求めて（3）：ドーナツの穴になつた話

【本誌の主な献呈送付先】

本誌の趣旨を広く各界にご理解いただくために、安部公房縁りの方、有識者の方などに僭越ながら本誌をお届けしました。ご高覧いただけるとありがたく存じます。（順不同）

近藤一弥様、池田龍雄様、中田耕治様、宮西忠正様（新潮社）、北川幹雄様、加藤弘一様、平野啓一郎様、巽孝之様、鳥羽耕史様、友田義行様、内藤由直様、番場寛様、田中裕之様、中野和典様、坂堅太様、ヤマザキマリ様、小島秀夫様、頭木弘樹様、高旗浩志様、島田雅彦様、赤田康和様（朝日新聞社）、富田武子様（岩波書店）、待田晋哉様（読売新聞社）

【もぐら通信の収蔵機関】

国立国会図書館、コロンビア大学東アジア図書館、「何處にも無い図書館」

【もぐら通信の編集方針】

1. もぐら通信は、安部公房ファンの参集と交歓の場を提供し、その手助けや下働きをすることを通して、そこに喜びを見出すものです。
2. もぐら通信は、安部公房という人間とその思想及びその作品の意義と価値を広く知ってもらうように努め、その共有を喜びとするものです。
3. もぐら通信は、安部公房に関する新しい知見の発見に努め、それを広く紹介し、その共有を喜びとするものです。

4. 編集子自身が楽しんで、遊び心を以て、もぐら通信の編集及び発行を行うものです。

